

42550

教科書文庫

4
810
44-1933
200030
2107

Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

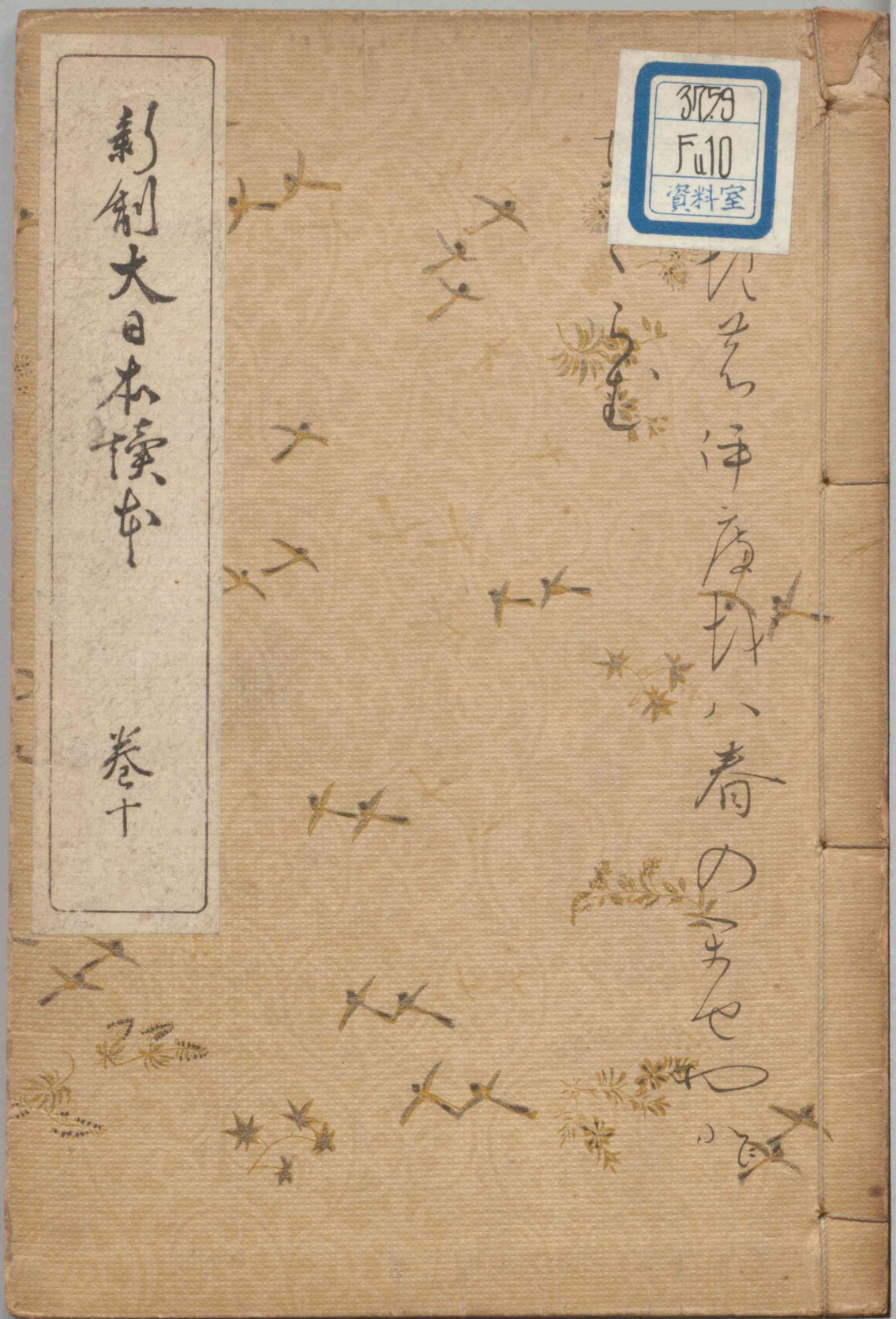
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

31759  
Fu10  
資料室

新創大日本横中  
卷十



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

3759  
Fu10

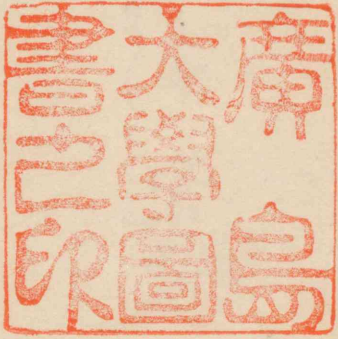
資料室

昭和六年十一月九日 中日學校國語文  
昭和八年七月六日 實業學校國語科  
文部省檢定濟

文學博士 藤村作編

新創大日本讀本

東京 大日本圖書株式會社



大嘗祭庭燎奉仕の記 五

山田秋徳筆

廻立股渡御

大嘗祭

新制大日本讀本 卷十

目次

一	海外發展の要諦	後藤新平	一
二	人生をうたへる詩 (詩)	中村孝也	一〇
一	希 望		一一
二	晚 鐘		一三
三	須磨のわび住ひ	(源氏物語)	一五
四	源氏物語	五十嵐 力	一九
五	大嘗祭庭燎奉仕の記	次 田 潤	二八
六	日本文化の創造力	河田嗣郎の文に據る	四三

〇七 清少納言枕草子抄

(清少納言枕草子)

五一

一 春はあけぼの

大 山

五一

二 五節供

五 十 鳥

五二

三 蟲は

五 十 鳥

五三

四 うつくしきもの

五 十 鳥

五六

五 香爐峯の雪

五 十 鳥

五七

八 清少納言

和 辻 哲 郎

五八

九 安立町の隠れ家

(萬の支反古)

六九

〇一〇 幾山河 (和歌)

佐 佐 木 信 綱

七四

一一 萬葉集の旅の歌

(雨月物語)

七八

一二 菊花の約

(雨月物語)

八五

〇一三 大晦日は合はぬ算用

(大 下 馬)

九九

一四 近世生活の眞髓

藤 村 作

一〇四

一五 荒浪千鳥の歌

北 原 白 秋

一一〇

〇一六 倭建命

(古 事 記)

一一二

一七 古事記と國家的精神

久 松 潜 一

一一五

一八 日本の民謡

島 木 赤 彦

一二九

一九 旅路

(土 佐 日 記)

一三九

一 宇多の松原

(土 佐 日 記)

一三九

二 歸家

藤 村 作

一四一

二〇 國文學の現代的意義

藤 村 作

一四五

二一 獅子ヶ城

(國性爺合戦)

一五一

二二 巢林子の藝術

藤村 作 一六三

一 世話淨瑠璃

一六三

二 時代淨瑠璃

一六八



後藤新平。  
巖手縣の人。  
安政四年六月生  
選信大臣、内務  
大臣等に歴任し  
た。伯爵。  
昭和四年歿。

一 海外發展の要諦

後藤新平

建國以來、遼々二千五百年の久しきに亙り、特殊なる地理を背  
景とし、特殊なる文明の綾を織り成し、特殊なる生活劇を演じ來  
れるもの、是日本民族である。實に我が日本民族は、其の特殊な  
る背景の前に展開した、萬古不易の國體と、東西無比の民族性と  
をもつてゐる。のみならず、臆ては世界的大發展を遂げんとす  
る潑刺たる意氣と雄圖とを抱いてゐる。併しながら絶海の孤  
島に生ひ立ちたるが爲に、日本民族は、鉢植の公孫樹に類するも  
のがある。亭々として蒼穹を摩すべき偉大なる素質を有しな  
がら、根柢を一杯土に托しゐる身の悲しさに、思ふさま根を伸ば  
し枝を張り得ざる公孫樹の姿は、是やがて日本民族の現下の姿  
ではあるまいか。

日本民族をこの狭い天地より救ひ出して、世界的沃野に移し植ゑんとするもの、即ち予が海外發展論の本旨である。言ひ換へれば、第一次には我が國を世界の日本となし、第二次には世界を日本の世界となすべき使命を遂げること、是ぞ我々日本民族



後藤新平

の理想であり、大精神であらねばならぬ。

我が皇室が日本民族の總本家として、悠久無比なるは、猶公孫樹が前世界より稀に残存する名木にして、ただ我が日本に於てのみ生長發育するが如く、眞に歴史上の奇蹟的美觀である。我々は是非ともこの世界の名木を以て自任し、我々日本民族を廣き地球上に繁茂せしむることを使命としてゐることを覺悟

しなればならない。併しながら、世界は沃野で天然及び人爲の肥料に富むと共に、また種々の瘴癘あり災害あることを忘れてはならぬ。是等の災害に打勝つて、自己の生命を培ひ育てるには、非常の努力を必要とする。即ち我々は、世界の文明を吸収して、日本特有の文化に資せんとするに當つて、營養物の良否を選り分ける識見、絶えず外より襲ひ來る災害に抵抗する弾力をもたなければ、自ら文明病に罹ることを免れない。されば日本民族をして、この職能と抵抗力とを得しめることが第一の急務である。

今や我々日本民族の脚下には、一碧萬頃の物質文明の沃野が開けてゐる。そして之を包むに、近代的の空氣と、科學の彩雲を以てしてゐる。所謂近代文明の我々を衝動する刺激は、華美であり、壯麗である。併しながら、その華美壯麗は、極めて刹那的に

は強く我々の眼を刺激するけれども、久しきに彌れば寧ろ内容の空虚に一種の寂しさ物足りなさを覺えしめるものである。これ近代文明は不自然にして不具なるが爲であり、内部の要求と外部の生活とが調和を缺いてゐるが爲である。

是等一切の不自然にして不健全なる要素が相合して、毒酒の如き世紀末の頽廢思潮を醸成した。けれども人間の生命力は岩を裂く急潭よりも猶熾烈に猶弾力に富んでゐる。生命の伸びんとする要求は、何物の障害をも突破して、その芽をふき根を張らずにはゐない。自然の伸張を妨げる一切の虚偽、一切の假面を擺脫せんとする努力、其の結果は絶えず争闘を續け、優勝劣敗の活劇となるのは、生物界の原則である。

かの世界戦争は、これを内部的に解すれば、人間生命の活火が虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協を破壊せんとし

世界戦争  
西曆一九一四—  
一九一九

て爆發したものである。即ち生命を失へる舊き文明を破壊して、最も自然なる最も健全なる新しき文明を創造せんとする産みの苦しみ、それが即ち世界戦争である。故に世界戦争は、既に生命を失ふべき十九世紀の老朽文明に最後の止めを刺し、將に現れんとする二十世紀の新鮮なる文明の大誕生を助けんとしたものである。従つて世界戦争の終結と共に、世界の思想に一大廻轉を來したことは、甚だ自然のことである。古來、戦争は事物の母なりといふ諺がある。トライチケが、永久的平和を夢みて遊惰に傾く國民は、疲弊困憊せる癡者なり。」と言つたのは、痛快に文明病に罹れる國家の運命を豫告したものである。戦争は是が外科的療治として卓効ある大手術、大淘汰に外ならぬ。次いで來るべきものは、新生命の發見である。廢頽的舊思想の革新である。この時に際して、我が大和民族は果して如何なる覺

トライチケ  
ドイツの史家、  
政論家。  
(1834—1896)



悟を持たなければならぬか。

世界に民族の數多しと雖も、日本民族ほど世界に無比な民族はないのである。皇室と國民との關係が、義は君臣にして情は即ち父子の如き状態にあること、驚くべき生々發展力を有する同化的進取的國民であるといふこと、是等の事實のみにても、世界何處の民族にもその匹敵あるを知らない。我々はこの世界に冠絶せる民族精神を益、大ならしめ、益、有意義たらしめ、日本民族の理想の實現に努力しなければならぬ。偏に頽廢せる歐米文物の吸收にのみ沈湎して、自己を忘れたる無自覺なる模倣をなし、彼に同化せられる方向に歩むのみであつてはならない。我は飽くまでも主にして、彼は飽くまで従でなければならぬが、偏狹なる排外主義的愛國論と、所謂民族的自覺とは別のものである。我々は再び日本民族を學び、日本民族の偉大性を色讀し

なければならぬ。そこに我等の無窮の生命があり、生々不死の發展がある。

日本は貧乏である。富の程度に於て物質的生産力に於て、遙に西洋に及ばないことは確に現在の事實である。けれども、若し日本人にして生々發展の元氣を有し、民族的團結力を有し、堅實な道義心を有し、鞏固な國家的觀念を有し、民族固有の精神、建國の本義を遵奉し、體得してゐるならば、敢へて深く其等の物質的方面の缺乏を悲觀する必要はない。予の憂へるところは、我が國粹の滅亡、大和魂の頽廢である。この患さへないならば、他の一切は固より、第二第三の問題であつて、多く問ふを要しない。嘗てウキルヘルム三世が、國歩の艱難に際して下したる勅語には、次の語が見えてゐる。曰く、

「國家は、その有形的の力に失ひたる處を補充するに、精神的の

力を以てせざるべからず」と。日本民族が益進んで世界的の大民族たらんとするには、先づ何よりも重大なる要件として、國民の一人一人が孰れも鞏固なる國家的精神を抱き、民族的自覺の眼を覺まさなければならぬ。畏多くも、世界無比の聖天子明治天皇が、維新の初に發布された御宸翰の中には、

朕コ、ニ百官諸侯ト相誓ヒ、列祖ノ御遺業ヲ繼述シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ハズ、遂ニ萬里ノ波濤ヲ開拓シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カンコトヲ欲ス。

とある。萬里の波濤を開拓し、國威を四方に宣布することは、明治天皇の世界的氣魄を示されたもので、固より建國の精神を一層明快に現代的に述べさせられたものに外ならない。

斯くの如き勃々たる世界雄飛の思想、膨脹發展の思想は、嘗に御歴代の天皇の大御心の中に宿つてゐたばかりでなく、日本民

族全體の血管の中に、常に湧き立ち、絶えず脈打つてゐたことを忘れてはならない。その民族的精神が現れて、或は桃太郎の鬼ヶ島退治の童話となり、實際には神功皇后の三韓征伐となり、倭寇となり、豊太閤の朝鮮征伐となり、或は日清戦争となり、日露戦争となり、朝鮮の併合となつたのである。我々は悉くこの志を以て、相團結し、相協力して、民族の大精神、我が國粹の發揚に全力を傾倒したならば、國威の隆々として世界に光被し發展すべきは疑念を容れない。

現代に於ける列國の情勢を觀るに、ドイツはその民族的實力に於て威を振ふに至らずと雖も、ユダヤ人の協同統治者として、物心兩面を支配せんとする抱負を示してゐるが、英國は今や世界的膨脹の極度に達し、爛熟既に正午を過ぎて日没に向ひつゝあるかの感なきを得ない。露國は、その尨大なる土地と人口と

を以て、しかも文化の低級なると、内在的破壊力の熾烈なるとに禍せられて、十分世界政策に意を用ふるの餘裕を缺いてゐる。佛國は、今日既にその發展力の營みを停止せる有様で、國民道德の頽廢と産兒減少の結果とは、佛國をして世界的民族競争の權利を抛棄せざるを得ざる悲境に陥らしめた。列國の情勢既に斯くの如くである。我等は斷じて躊躇逡巡すべき時ではない。偷安逸樂を貪るべき時ではない。益、その膨脹力を鼓し、開國進取の旗を押し立てて勇猛邁進すべき時である。我が國固有の民族精神、生々發展の氣慨、道義的健闘の雄志、強大なる同化力を奮ひ起して、我が理想を發揮し、我が意氣を試むべき時である。

(後藤伯爵國民訓)

## 二 人生をうたへる詩

中村孝也

### 一 希望

中村孝也  
群馬縣の人。  
文學博士、史料  
編纂官。東京帝  
國大學助教授。

あゝ、日はのぼる。  
見わたす限り、はてしも知らぬ青海原、  
浪は燃え、雲は輝き、  
光明燦として、大天大地に照映する。  
壯んなるかな、無象の天軍。  
齊しく擧ぐる歡呼の聲の勇ましさ。  
ひとり巖上に屹立して、  
この大光景に對すれば、  
邁進の希望躍如として脈管に漲る。  
あゝ、日はのぼる。  
とこしへの青年よ、

双脚しかと大磐石を踏まへ、  
 双手を高く天半にかゝげて、  
 心ゆくばかり  
 大宇宙の靈氣を呼吸する爽かさ。  
 胸は膨らみ、  
 筋肉は隆々として勇氣に滿つ。  
 見よ、現實は脚下に在り。  
 寄せては碎くる磯浪の、  
 不斷の争鬭を微笑に迎へて、  
 眼は遠し無限のあなた。  
 久遠の生命の流れ流るゝところ、  
 希望の國土、理想の憧憬、  
 あゝ、若き生命にとこしへの祝福あれ。

ミレエ  
 Millet (1814—  
 1875)  
 畫家、佛蘭西人。

二 晚 鐘 (ミレエの名  
畫に題す)

日は暮れる、廣野のあなたに  
 夕映の色がしだいに  
 薄れてゆく。  
 鋤きかへされた黒い  
 土のうねりを、  
 凝然と眺め入る若い  
 心の底に、  
 清水のやうに悦ばし  
 さが湧く。  
 軽く快い疲勞を慰め  
 顔の、



(筆エレミ) 鐘 晚

妻のすがたのかひがひしき、  
劬りがちに家路を見かへる時、  
野もせを遠くさながら夢のやうに、  
漂ひ來る聖なる鐘のひびき。

若き二人の胸のなかに、

現し世ならぬふる里の思ひ出が、明るく  
香はしくなつかしくめぐつて來る。  
どこからともなく聞える囁きの聲。  
白い光が匂ふ、それは神のみ國。

みどり兒のやうな甘い悦びに満ちて、  
かたみに祈る合掌のつゝましき。

鐘のひびきはその魂を柔かに包んで、  
夕ぐれの静けさをなみだたせながら、  
帝座のあなたに遠くのぼつてゆく。  
(修養文藝名作選)

### 三 須磨のわび住ひ

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の  
中納言の關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々は、げにいと近く聞  
えて、また無くあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。御前  
にいと人ずくなにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕  
をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波ただこもとに立ちく  
る心地して、涙落つとも覺えぬに枕浮くばかりになりけり。  
琴を少し掻きならし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾き  
さし給ひて、

關吹き越ゆる  
旅人は袂涼しく  
なりにけり關吹  
き越ゆる須磨の  
浦風。(新古今  
集、在原行平)  
枕浮くばかり  
ひとり寝の床に  
たまれる涙には  
石の枕も浮きぬ  
べらなり。  
(古今和歌六帖)

思ふかたより  
浪立たば沖の玉  
藻も寄り來べく  
思ふ方より風は  
吹かなむ(玉葉  
集、凡河内躬恒)

戀ひわびてなく音にまがふ浦波は

思ふかたより風や吹くらむ。

とうたひ給へるに、人々おどろきてめでたう覺ゆるに、忍ばれて  
あいなる起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。げにいか  
思ふらむ。我が身ひとつにより、親はらからかた時たち離れが  
たく、ほどにつけつゝ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると思  
すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと  
思せば、晝は何くれとたはぶれごとうち宣ひ紛らはし、つれづれ  
なるまゝに、いろくの紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しきさま  
なる唐の綾などに、さまざまの繪どもかきすさび給へる、屏風の  
面どもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語り聞えし海  
山の有様を、遙に思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯の  
たゞずまひ、になく書き集め給へり。此の頃の上手にすめる、千



(語物氏源入繪) 秋の磨須

枝、常則などを召して、つくり繪  
仕う奉らせばやと、心もとなが  
りあへり。懐しうめでたき御  
有様に、世のもの思忘れて、近う  
馴れ仕う奉るを嬉しきことに  
て、四五人ばかりぞ、つと侍ひけ  
る。前栽の花いろく、咲き亂  
れ、おもしろき夕暮に、海見やら  
るゝ廊に出て給ひて、たゞずみ  
給ふ御さまの、ゆゝしうきよら  
なるに、ところからはまして、こ  
の世のものとも見え給はず。  
白き綾のなよ、かなる、紫菀色

二千里外古人心  
三五夜中新月  
色、二千里外古  
人心(白氏文集)  
霧や隔つる  
九重に霧や隔つ  
る雲の上の月を

など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなくうち亂れ給へる御さまにて、釋迦牟尼佛弟子と名のりてゆるやかによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より、舟どもの謠ひの、しりて漕ぎ行くなど聞ゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらる、も心細げなるに、雁のつらねて鳴く聲、楫の音にまがへるを、うちながめ給ひて、御涙のこぼるゝをかき拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠にはえ給へるは、ふるさとこひしき人々のこゝち、みな慰みにけり。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊こひしく、ところどころ眺め給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。二千里外古人心と誦じ給へる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、霧や隔つると宣はせしほど、いはむ方なくこひしく、折々の事思

遙に思ひやるかな。源氏物語賢木) 恩賜の御衣云々

去年今夜侍清涼。秋思詩當獨斷腸。恩賜御衣今在此、捧持每日拜。餘香。菅原道真

源氏物語

五十四帖。紫式部の作。初め四十一帖は光源氏を中心としてその花やかな生涯を描き、次の三帖は薫君の生立、後の十帖は薫君の失意の生活をゑがいてゐる。

五十嵐力

山形縣の人、明治七年生國文學者、文學博士、早稻田大學教授。

ひ出で給ふに、よゝと泣かれ給ふ。夜更け侍りぬと聞ゆれど、なほ入り給はず。

見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ

月の都ははるかなれども。

その夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御様の、院に似奉り給へりしも、こひしく思ひ出で聞え給ひて、恩賜の御衣は今こゝにあり、と誦じつゝ入り給ひぬ。御ぞはまことに身放たず、傍に置き給へり。

憂しとのみひとへに物は思ほえて

ひだりみぎにもぬるゝ袖かな。

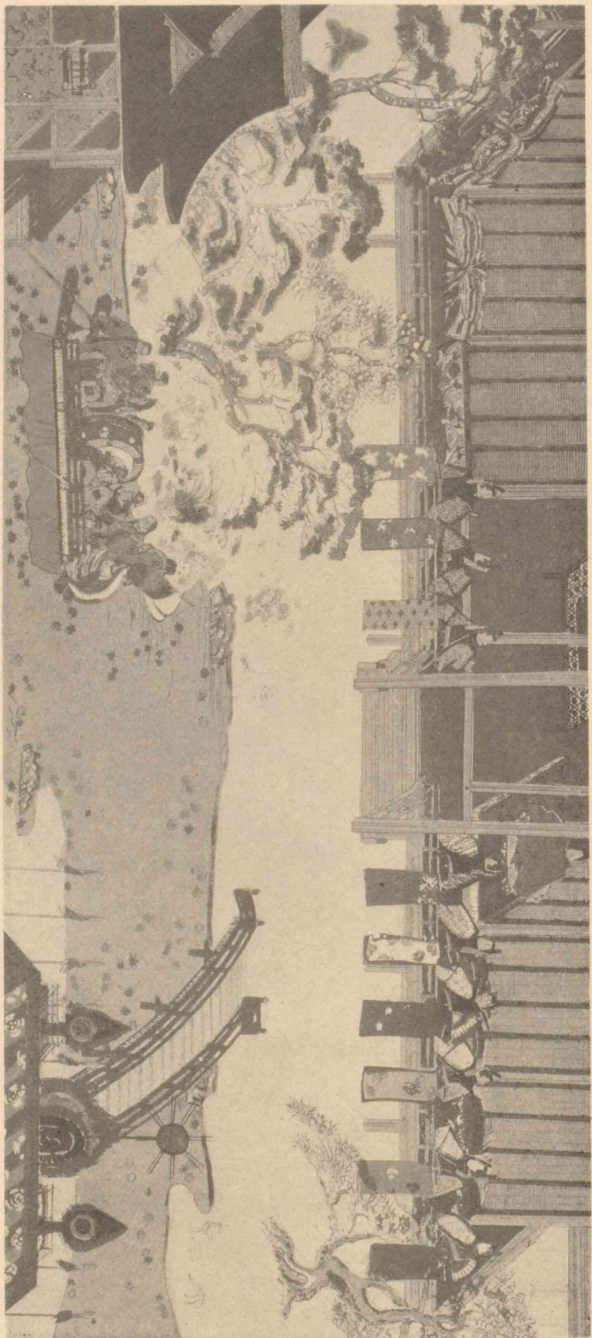
(源氏物語)

#### 四 源氏物語

五十嵐 力

ここに聰明にして情に厚く美を愛する一團の人間があつて、

國民中の最高階級に位し、其の國最高の教育を受け、而して其の國特殊の文化が成立ちかけた時に生れたと假定せよ。此の時、國民中の他の一團が彼等を保護して、衣食はもとより政治、兵馬の實務に至るまで、煩はしい事は一切吾等が引受けるによつて、決して心配なされるな、ただ、風雅の道に心を潜めて、樂しく美はしく世を送られよ。」といつて、山水明媚なる一郭の土地を其の遊樂の場所にあてがつたと假定せよ。かくして彼等は生活の苦を知らず、事務の煩を知らず、干戈の慘を知らず、感情、文藝の世界にほしきまゝに悠遊して二百年三百年を過したとせよ。其の結果、一代の風潮が感情本位になるべきは見易き道理である。従つて其の弊が流れて文弱になり、奢侈になり、淫靡になり、婦女子が重んぜられるやうになり、臆病な陰險な謀計が行はれるやうになつて、腐敗、墮落を極むべきことも亦争はれぬ自然の



藤原時代貴族宴遊の圖



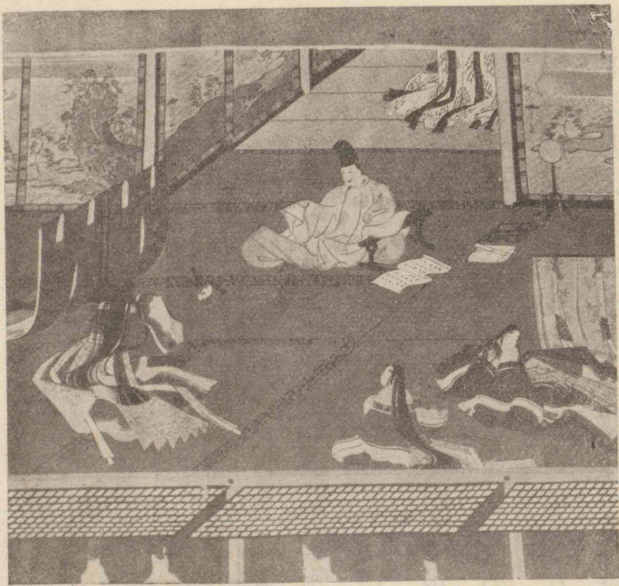
経路である。

藤原氏専權時代の宮廷生活、公卿生活は、まさしくかくの如きもので、又まさしく斯くの如き結果に達した。彼等は支那、印度の文明が漸く我が國情と融和して、まさに特色ある文明が成立たうとする時にあたり、新文明建設の責任ある地位に居りながら、不思議な運命に操られて、現實と懸け離れた内裏雛式の生活を送ることとなつた。彼等は虚位を擁して、對人民、對國土の政務とは殆ど全く相關することがなかつた。大臣納言はただ朝廷の儀式を行ふための役目、大將、中將は弓、胡籥に威嚴を飾る名義だけの武官、文官は民情を知らず、又知らうともせず、武官は武事を習はず、戦争を夢にも見ず、文武を問はずして、滿廷悉くこれ宮内官、悉くこれ風流歌人であつた。彼等ほど自然に遠ざかつた者は無い。彼等は嵐鴨の山、紫水明を賞し、春花秋葉の美を爭

つたとはいふものの、脚下なる土地や、土地に關した物には一顧を與へる事をも屑しとしなかつた。露を見て「何の玉ぞ」と問ひ、農産物を見て「蕪めくもの、大根らしきもの、葱とかいふもの」などと言ふのが、彼等の間に於ける一種の誇で、土臭い物は賤山がつと共に、すべて「怪賤」の二義を兼ねた「あやし」といふ形容詞の下に却け去るを常とした。彼等は自ら稱した通り、地を離れ政務を離れた殿上人、雲の上人であつた。而して彼等を羨みながら、其の地位を奪はうとはせず、甘んじて其の下風に立ち、其の爪牙となり、藩屏となつて、彼等を荒い風にあてず、彼等の逸遊費を負擔して風流を恣にせしめた者が即ち地下人等である。彼等は地下人が自覺して自立の念を起すに至るまでは、快く雲上の夢を貪ることを得たのである。

此の感情本位文藝本位の時代思想が十分に發展して行くべ

き所まで行つた社會——歌舞遊宴歌合・繪合・供養・祈禱・祭禮・方違

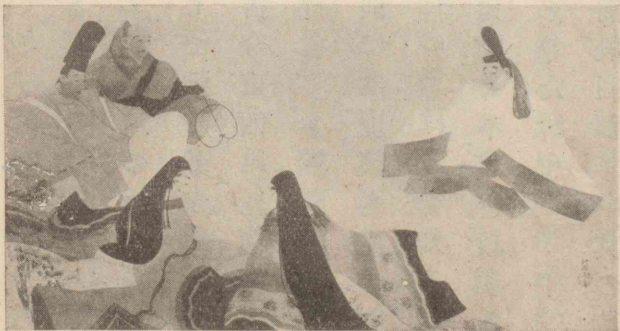


（記驗現權日春）俗風朝安平

及び婦人中心の權力争ひなどが盛んに行はれた社會——藤氏の專權を機會として造化翁が描き出した古今東西に比類なき情の社會——端麗なる容姿の前には虎狼も微笑を獻じ、物のあはれを知る者には鬼神も不義を赦すと考へられた社會——平安朝の前後四百年中其の特色の最もよく發揮された時代の社會——此の一あつて二なき社

會、再び現るべからざる社會をば、當時漸く出來たばかりの新し  
い假名文字を用ひ、今しも方に熟した  
新國語を用ひ、洗練推敲を重ねて、立派  
に活きくと描き出したものが、即ち  
紫式部の源氏物語五十四帖である。

感情本位、文藝本位といふ如き單純  
な言葉で前後四百年に互る平安朝を  
説明するのは、或は獨斷に過ぎるであ  
らう。けれども時代思想の中心が此  
處に在つたのは疑のないことである。  
又源氏物語が平安朝社會を遺憾なく  
寫したといふのも多少穩當でないか  
も知れぬ。けれどもダンテの「神曲」が全盛時代のスコラ哲學の



大宮人 (山村耕花筆)

ダンテ  
Dante (1265—  
1321)  
伊太利の詩聖。

神曲

ダンテの著、天  
國地獄煉獄の三  
篇より成る一大  
詩篇。

スコラ哲學

Scholasticism  
歐洲中世に行は  
れた哲學の一  
派。

本居宣長

享保十五年伊勢  
國松坂に生れ、  
享和元年歿、年  
七十二。  
國學者。

理想を描いたといはれるほどの意味で、源氏物語が成熟した平  
安朝の理想を寫したといふに異論はあるまい。又此の時代の  
文學は土佐日記・竹取物語を初として、落窪物語・古今集・枕草子・狹  
衣物語・榮華物語・大鏡等、一つとして此の時代思想に觸れて居ら  
ぬはないけれども、源氏ほど切實に此の思想に觸れ、源氏ほど圓  
滿に此の思想を現したものはない。

本居宣長は「玉の小櫛」に「源氏」を稱して、在來の物語に現れた人  
物の類型的なるに反して、個性を書分けた事、在來の物語が事件・  
趣向の奇抜を狙つたのに反して、人情を寫し、平凡・自然の事柄を  
寫した事、漢文一流の粗漫なる形式的文章に反して、心理變遷の  
過程を精細に描いた事、これが此の物語の特色であるといふ意  
味のことを述べてゐる。これは時代を超越した卓見で、海淫の  
書といひ、教訓の書といひ、佛理を現した作といへる類の愚説の、

足許にもよられぬ大批評であり、急所を捉へ得た名批評といつてよい。

宣長の評でも知られる如く、源氏物語は我が明治以前の文學中の最大傑作の一で、殊に現實的・自然的・平凡的・精寫的なる最近文學の趨勢を豫想したと見られる點さへある。別して驚くべきは、源氏が世界に於ける最古小説の一たる事である。小説を譬喩物語や傳奇の類と區別して、人情展開の過程を寫した物語といふ意味に解すれば、英國の小説はリチャードソンの「バメラ」の出でた一千七百四十年、即ち今より約百七十年以前に其の端を開くといはれる。西洋に於ける寫實小説の元祖と謂はれるボッカチオの「デカメロン」の公にされたのは一千三百五十三年、即ち今より凡そ五百六十年前である。支那・印度には、無論「源氏」以前に此の意味の小説といふものはなかつた。此の見地より

リチャードソン

Richardson

(1686—1761)

英國の小説家。

ボッカチオ

Boccaccio

(1313—1375)

伊太利の小説家。

デカメロン

Decamerion

十日物語。

すれば、我が源氏物語は、日本に於ける最初の小説であるのみならず、又東洋最初の小説であるのみならず、或は世界に於ける最初の小説であるかも知れぬ。少くとも、世界最古最大の小説の一たることは疑なきことである。然るにかゝる古文學の寶典が名のみ徒に高くして廣く讀まれぬは何のためか。ただに普通人の間に於てのみならず、國文研究者にすらも通讀されぬ場合の往々あるのは何故か。思ふに、これ一つは其の題目たる宮廷生活が、後代の國民に對して餘りに懸け隔つて理解し難くなつたため、一つは平安朝の朦朧たるほめかしぶりの語格文體が直截明快を欲する後世の讀者の理解力に多大の租税を掛けるため、一つは洗練を極めて煎じ詰め過ぎた文體が、走り讀みを常として繰返して讀むことを好まぬ後世の讀者の頭に入り難いためであらう。かやうな面倒・不便利はあるが、我が文學の

誇となるべき此の傑作を、此のまゝ、棚に上げて敬遠主義を取るの如何にも残念な事である。(新國文學史)

### 五 大嘗祭庭燎奉仕の記 次田潤

昭和三年十一月、御即位の大禮を京都に於て擧げさせられるに當つて、國家最重の御儀と申すべき大嘗祭に、火炬手として奉仕することの願を聽許せられたのは、微賤の此の身にとつて、生涯を通じての最大なる光榮であるばかりでなく、實に子孫にも語り傳ふべき榮譽である。

十四日はいよく、大嘗祭の當日である。此の日は朝から雨雲が空を覆うてゐた。午後三時半、どんよりと曇つた空模様を氣遣ひながら、大嘗宮の朝集所に行き、直ちに著替所に出頭した。同役の人々は既に多數集まつて、装束を著けてゐる所であつた。

次田潤  
岡山縣の人、學  
習院教授。

#### 火炬手

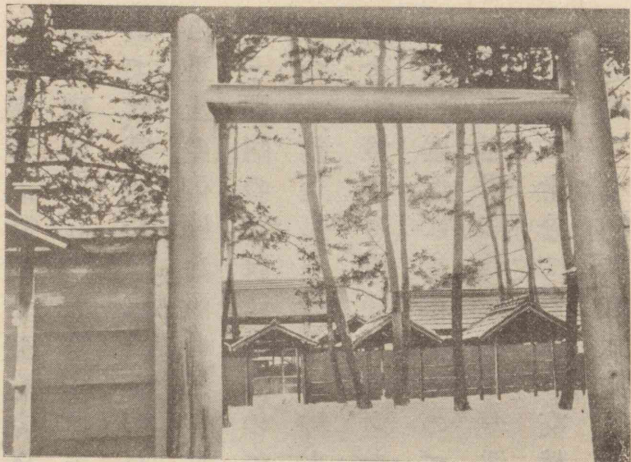
大嘗宮の四方の  
柴垣門外の左右  
に設けられた庭  
燎舎で燎火をた  
く衛士。服装は  
桃花染(あらぞ  
め)の布衫に細  
纒の冠を頂く。

#### 大嘗宮

大嘗祭を行ふた  
めに新設せられ  
る宮殿。悠紀殿  
主基殿、廻立殿  
等より成る。

#### 廻立殿

悠紀主基兩殿の  
北方柴垣門外に  
設けられる。主  
上が此の殿内に  
て小忌の御湯を  
召し御祭服に改  
めさせられた  
後、悠紀殿に渡  
御、御親祭の後  
再び此處に還  
御、更に小忌の  
御湯を召し主基  
殿に渡御あらせ  
られる。



式部官が來て、吾々に奉仕の位置交替時刻などを記したものを示して、種々の心得を申し聞かさされた。それによると、吾々は一時間づつ三回奉仕するのであつて、又私の奉仕する三回の中、初の二回は廻立殿に近き北神門の庭燎に、最後の一回は主基の膳舎に面した、西神門の庭燎に奉仕するのであつて、しかも其の第一回は恰も悠紀殿へ渡御の時刻に當り、第三回は主基殿の神饌行立の時刻に當つてゐるのは、之を拜觀する光榮を擔はしめようとの、特別の思召によるものと拜察せられ

神御衣  
神に奉る御衣をいふ。

繪服・龜服  
絹布と麻布のこ  
と。共に目籠に  
收めて八足案に  
載せ、神座の北  
方東西に相對し  
て奉安せられ  
る。

火鑽臼・火鑽杵  
神火を造る爲に  
用ゐる檜製の臼  
(板)と杵(棒)。  
臼の窪みに杵を  
立て兩手で鑽り  
揉み摩擦熱によ  
つて發火する。

て、勿體ないことだと思つた。

やがて五時三十分になると、庭上の控所に居る前番の火炬手達は列を正して大嘗宮の方に參進した。これより先大嘗宮に於ては、掌典長が掌典を率ゐて、悠紀・主基兩殿の内陣に、神の御座と聖上の御座を設け奉り、又神御衣である繪服・龜服を奉安するなど、殿内の鋪設に當るのであるが、次いで火鑽臼と火鑽杵によつて發火した清淨な神火を、兩殿の白木黒木の御燈樓以下、各殿舎の燈臺や燈籠にも之を移し、引續いて四方の各神門の左右にある庭燎にも移したのであつて、今や前番の火炬手は、それぞれ其の配置に就いて、この淨火を焚き續けてゐるのである。

六時二十分に最初の交替時間が來た。吾々は舍人に導かれて庭に下り、同班の人達と共に列を整へ、大嘗宮の板垣御門の内へ參進した。「椎の和惠(和惠は小枝の轉じた語であらう)を規則

脂燭  
松を割つて油を  
塗り火をともし  
やうにしたもの。

正しく挿した神々しい柴垣に沿うて、ほの暗い神域の銀砂を踏んで行つた時には、神々しさが身に迫つて來て、胸のをどるのを覺えた。暮色にこめられた松の木の間に仰がれる悠紀・主基の神殿は、さながら墨繪のやうに美しい。夕暮から庭燎舎に端坐して、火を焚いてゐる前番の火炬手の姿が、闇の中に鮮かに浮び出てゐるのも、美しい添景である。私は柴垣の傍に積み重ねてあつた薪の束を小腋にかゝへて、廻立殿の御前なる北神門の東掖の庭燎舎に行つて、前番の人と交替した。私の後方には今一人の火炬手が控へてゐる。これは渡御の時、侍従が執るべき脂燭に火を點ずる役目を帯びてゐた人であることを、後になつて知つた。

私が坐つて居る圓座の右手の後方には、前番の人が運んだ薪の束が積んである。薪は長さ七八寸許のもので、細く割つてあ

る。圓座の前には細長い火箸が横たはつてゐる。手に執つて見ると、二尺五寸許の皮附の櫻の細枝を切り揃へたものであつて、極めて古雅な火箸である。私はそれを手にして、稍下火となつた火の下の餘燼を掻き除けて、新しく薪を五六本さし添へた。火はぱつと燃え上つて、あたりが急に明るくなる。明るくなつた火の光であたりを見ると、先づ左方には柴垣が東西に繞らされて、神戟が二竿樹てられてゐるのがほのかに見える。自分の前方の程近い所には、廻立殿に續く廊下が左右に横たはつてゐて、其



小忌衣着用圖

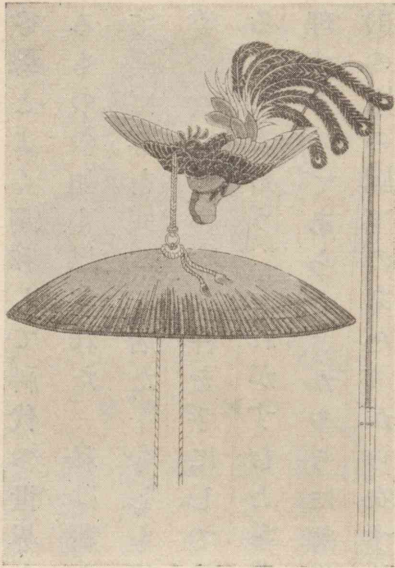
衛門

四方の柴垣門の外披の帳舎に就き大嘗宮の警固の任に當る。東帶の上に小忌衣を加へ劍を帯び平胡籙を負ひ弓を執る。

小忌衣

白布に山藍の葉で小草小鳥の文模を摺りつけた單。神事に奉仕する者が装束の上に着用する。

の手前の衛門の幄には、竹で造つた丸形の腰掛に坐して、威儀を正してゐる三人の衛門が、身動きもしないで控へてゐるのが眼に映じた。平胡籙に挿んだ箭の羽根が、小忌衣せきぎの上にほんのりと浮んでゐるのが、闇の中にも美しく見えた。今や聖上陛下は小忌の御湯を召し給うて、すべて御仕度を終らせられ、やがて來るべき出御の時刻を待ち給ふのであらう。かやうに想像し奉るにつけても、微賤のこの身が、かかる森嚴崇高な御殿の大前に奉仕してゐる事を、畏多い限りと思ふと共に、この身に餘る光榮が今更沁沁と感じられて、火を焚き參らする手さへ震ふのであつた。



御菅蓋

稻春歌  
大嘗會に、神に  
供ふる稻を春く  
時歌ふ歌。

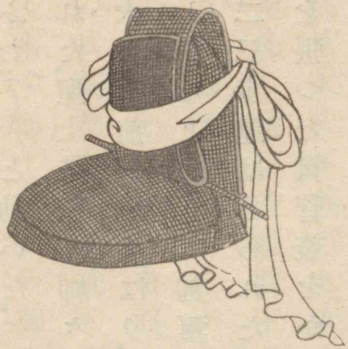
禪姿

白色帛畫衣、唐  
衣、紅切袴の上  
に白色の平絹に  
山藍摺の禪を着  
用した姿。

日蔭蔓

深山に生ずる緑  
色紐状の蔓草。  
大嘗宮に奉仕す  
る者は悉く之を  
冠の巾子に結び  
左右に垂らす。  
但し婦人は絲製  
のものを用ふ、  
之を日蔭絲とい  
ふ。

かれこれする中に、悠紀の膳屋で謠ふ稻春歌が、宵闇の静寂を破つて流れ始めた。歌詞はそれと聞き分けられぬほどに、長めて謠はれるのであるが、古雅な和琴の調と笏拍子の音が、悠長な歌聲とよく調和して、神代の世界を眼前に展開する序曲を奏するものの如く思はれた。私は薪を投げ入れながら、息をひそめて樂に耳を傾けて居た。今しも彼方の悠紀の膳舎に於ては、禪姿の女官が、古雅な杵を手にして臼を取り巻いて稻春をしてゐるのであらう。それがすむと掌典は掌典補を率ゐて、神饌を調理するのであらう。かやうに想像してゐる中に、右手なる廻立殿の東の廊下のあたりから、衣ずれの音がさわやかに聞え始めたかと思ふと、御束帶の上になすが、しい小忌衣を加へさせられ、御冠に日蔭蔓ひかげのむらを著け給うた皇族各殿下が、ずらりと二列に整列し給ふのがほのかに窺はれ、更にそれに續いて一層衣ずれの



御冠の御帟

音がさやめき立つのは、各妃殿下の御行列であらうと思はれた。この時私は全身に緊張を覺えると共に、頻りに薪をさし加へたので、燃え盛る火は顔を照らして、額に汗の流れるのを感じた。各皇族殿下は整列し給うたまゝ、よほど長い間身動きさへし給はずに、ぢつと列立し給ふやうであつた。今や大嘗宮の内は静肅の極に達し、咳嗽一つ聞えない。此の時私の後方に控へてゐた火炬手は、三本ばかりの脂燭を執つて、私が奉仕してゐる庭燎の火の中に差入れて火を點じ、その二本を前面の廊下に立つてゐる侍従に一本づつ渡し、残る一本を自ら執つて、私の右手

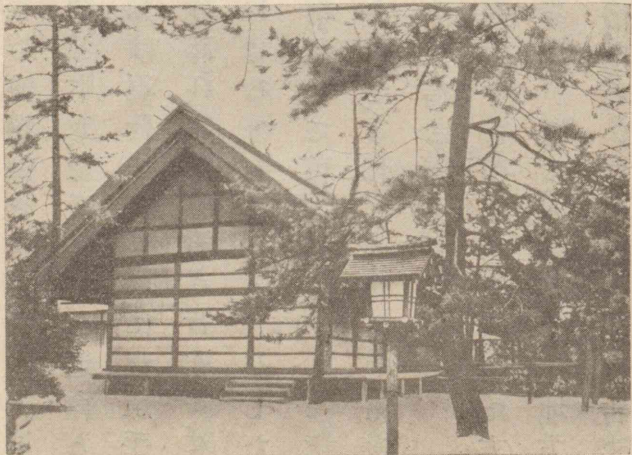


御幘の御冠  
御冠の纓を巾子  
(ゴジ)の外へ二  
折にして白絹に  
て結びたるも  
の。

の庭に佇立した。稍あつて衛門がすつと直立したかと思ふと、廊下に用意してあつた御菅蓋を高く捧げる人があり、それと同時に廻立殿の中央の入口に垂れてあつた白絹の御帳が、左右にふわ〜と動いた。この時純白の御祭服に御幘の御冠を召された、聖上陛下の神々しい御姿が現れたまうた。式部長官・宮内大臣が前行を承はり、二人の炬燵の侍従が左右から御路を照らし奉ると、恭しく劔璽を捧げた侍従のあとに、聖上陛下は玉歩を二三步運ばせられた。すると御後から他の侍従が、左右に御綱を張つた御菅蓋をかざし奉り、御後には侍従長同武官長等が扈從し奉り、それに續いて皇族殿下が御歩を運ばせられた。御路には白い布單を鋪き展べてあるが、更に進御につれて侍従が葉薦を敷き、御後からは之を巻いて行く上を、靜かに渡御あらせられた時の御姿は、森嚴の極みであつて、全く神を目のあたりに仰

ぎ奉る思がした。

聖上陛下の渡御に次いで、皇后陛下の進御がある。廻立殿の東脇戸から出御になり、式部次長・皇后宮大夫が前行し、女官長以下が御後に隨ひ、各妃殿下が供奉し給うて進ませられたが、五衣唐衣の上（カサカサ）に白い小忌衣を召し給ひ、二條の日蔭絲を長く垂れ給うた美しくもすが〜しい御姿が、御道を照らし奉る炬燵の光に、闇中にほのかに拜せられ、御後に曳かせられる御裳御袴のさやめく音が、靜寂の夜に高く鳴つた。その衣



大菅宮廻立殿

ずれの音は今でも耳底にある思がする。この時の御有様は、平安時代の宮廷の有様を描いた美しい繪巻物を、夕闇に繰り展べたやうであつた。聖上陛下の渡御と申し、皇后陛下の進御と申し、共に森嚴崇高の限りであつて、私は現代の大嘗祭に火炬手の一人として奉仕してゐることを打忘れ、まるで遠き昔の宮廷の、この上もない嚴めしい神事を拜してゐるやうな感じがした。此の瞬間こそ私にとつては、生涯を通じて再び經驗することのない、いと尊い印象を得たのであつて、これはいつまでも美しい夢のやうな影となつて、胸の奥深く宿るであらう。

夢見るやうな心持から稍さめた頃、さきの樂とは違つた方角から、國栖の古風が響いて來た。それが終ると、更に悠紀地方の風俗歌が聞えた。國栖といひ、風俗歌といひ、何といふ高古素樸の調であらう。樂人が聲を長く引いて歌ふ其の調子は、此の世

國栖の古風

應神天皇の御時  
吉野の國栖の士  
民が酒を獻じて  
嗜つた古例に基  
く古樂。今は樂  
官によつて奏せ  
られる。

の如何なる音樂よりも古いものであつて、聞く者の心を遠き神代に誘ひ、眼前に神代のまゝの神事をありく、と想起せしめなければやまない。此の樂の音に續いて、神樂の音がほのかに響き始めた頃、交替の時刻が來たので、名残惜しくも退下した。一時間がまるで夢の中に過ぎ去つたやうに思はれた。

控室に退いてから時計を見ると、まだ七時四十分であつた。九時四十分から第二回目の奉仕を始め、前回と同じく北神門の庭燎舎に就いて、約一時間庭燎に仕へ奉つた。

やがて時は過ぎて翌十五日となる。零時三十分から主基殿の西南に當る西神門の庭燎舎に導かれ、圓座の上に腰を下ろすと間もなく、板垣の外を警固する軍隊の交替する物音が聞えた。それに次いで長柄の傘をさしかけさせた樂官が十人許、闇の中から現れて、前方の廊下を傳つて膳屋の方へ消えて行つた。其

の中に一人和琴を抱いて行くのが幽かに見えた。間もなく主基の稻春歌が始まる頃、雨はしとくと降り濺ぎ、自分の頭上の屋根を打つ音も聞え、軒端からしたゝる雫が、繁く砂の上に落ちるやうになつた。夜が更け行くにつれて、雨脚がますます繁くなり、あたりはいよゝゝ神祕になりまさるのであつた。先の樂官が稻春歌を奏し終ると、やがて打連れて廊下を傳はつて、主基殿の樂舎の方へ引移つて行つた。すると間もなく、左手の柴垣の彼方から、國栖の古風が雨の音にもまぎるゝことなく響き來り、それに續いて主基の風俗歌が奏せられた。此の奏樂の間に、四方の國々、領地の端々から獻つた御庭積の机代物が、帳殿の案上に供へられてゐるのである。樂が終つた時には、掌典長が主基殿に參進して、嚴かに祝詞を奏するのである。あたりは秋雨に打ちしめつて、いよゝゝ神祕の氣が満ち満ちる。

神樂歌は和琴、笛、箏、箏などによりて奏せられてゐるらしく、時笏拍子の鳴るのが聞える。其の神さびた樂音は、何とも名狀し難い幽玄な調であつて、琴の絃を指で摘み上げて弾くのかと思はれるやうに、ポン／＼と鳴るかと思ふと、すべての絃を横に搔き撫でるやうな音がすることもある。笛の音が加はつて樂が高調に達したかと思ふと、又もとの靜かな調に落ちて、笏拍子が鳴る。神代の遠き昔に於ける祭の夜が、今目の前に浮んで來て、私は自己を忘れてゐると、火が衰へてゐた。我に返つて薪をくべると、パチ／＼と音を立てて燃え上る火が、漆黒の闇を急に明るくする。神樂歌が長く續いてゐる中に、陛下は主基の神殿の内陣に進御遊ばされて、天照大御神を始め天つ神、國つ神の御前に、海の幸、山の幸を供進し給ふ事であらう。幽界から來臨し給うた神靈と、現つ神なる聖上陛下の御心とが、交々通ひ給ふ神

祕極まりなき大嘗祭は、今や其の高潮に達してゐるものかと推し量られる頃、名残惜しくも交替の時が來た。

長柄の傘に深夜の雨を凌ぎつゝ、老松の木の間を縫ひながら、足音を忍ばせて退下する我々の行列も、また太古のまゝの姿であらうと思はれた。

控室に退下して、當夜の莊嚴な御有様などを語り合つてゐる中、二時半頃と思はれる頃、御滞なく御親祭を終らせられたといふ喜ばしい報に接した。式部長官は直ちに東京の青山御所にまします皇太后陛下に、其の旨を長距離電話で御報告申し上げべく命じた。皇太后陛下には、今宵この御報告を受け遊ばされてから、始めて御寢に就かせられ給ふのであると承つた。

大嘗祭の諸儀が濟んでから、我々は再び鄭重な酒饌を賜はつた。これを曉の御認と申す。四時頃になつて、曉近き雨の中を

宿舍へ歸つた。(國語と國文學)

## 六 日本文化の創造力

日本の文化が模倣の文化だと言はれるのは、已むを得ない。けれども其所に全然獨創の跡を留めないといふことは出來ぬ。たとへ我が民族は獨創の能力に於て、歐洲諸國人や、昔の印度人や支那人やに比較して劣つて居るにしても、古代からの我が文化の跡を尋ねれば、そこに連続せる創造の功績を認めないわけには行かぬ。

現代の文化は、其の源流こそ比較的簡單に説明し得られるが、其の發達が複雑多岐なる爲に、是に就いて我が民族の獨創力を一々指摘して立證することは困難たるを免れぬ。併し少しく古い所について見ると、我が文化の特性を指摘して、民族的獨創

力を論證することは、必ずしも甚だしく困難とは思はれぬ。我が國の文化の特性が、民族の獨創力に依つて常に鮮かに彩色せられて來たことは、摸倣の中に表れた所謂日本化に依つて、之を窺ふことが出来る。如何ほど我が文化の摸倣的なること、を高唱する人でも、古來我が國に攝取された外來文化が、常にわが民族固有の坩堝の中に鎔解されて、日本化されたことと、從つて摸倣ながらに純日本のものとなつてしまひ、原文化とは著しく調子の變つたものとなつてしまふことは、之を否認し得ないであらう。此の日本化といふことは、我に獨創の能力なくしては、到底行はれ得るものでない。然もこの日本化は、決して惡化、醜化、劣化を意味しない。寧ろ日本化されることに依つて、原文化以上に、美しいものにされ、味あるものにされ、濫いものにされ、和かいものにされるのが、普通の例である。

法隆寺 奈良縣生駒郡法隆寺村に在る。法相宗大本山。七大寺の一。

中宮寺 法隆寺の東。斑鳩尼寺といふ。

藥師寺 奈良縣生駒郡都跡村西京にある七大寺の一。法相宗大本山。

三月堂 東大寺に屬する法華堂。三笠山麓にある。

唐招提寺 奈良縣生駒郡都跡村五條にある律宗唯一の本山。

外來文化の日本化といふことは、之を宗教や道德やの方面に就いても見られるが、それよりもつと眼に見易く論示し易いのは、常に物の形を取つて表れる所の美術の方面である。古代から始めて、我が美術の史的考察を試みる者は、最も容易に我が民族の創造力を信じ得るであらう。

法隆寺の壁畫や、彫刻諸佛像や、中宮寺の觀音像や、藥師寺の藥師三尊や、同じく東院堂の聖觀音像や、乃至は三月堂の建築及び諸像や、唐招提寺の金堂建築やに於て、誰か日本化の美しきあとを認め得ざる者ぞ。



(壁西)畫壁堂金寺隆法

法隆寺の壁畫や、彫刻諸佛像や、中宮寺の觀音像や、藥師寺の藥師三尊や、同じく東院堂の聖觀音像や、乃至は三月堂の建築及び諸像や、唐招提寺の金堂建築やに於て、誰か日本化の美しきあとを認め得ざる者ぞ。

アジャンター  
ボンベイの東北  
の深山の間にあ  
つて、谷川の左  
岸の絶壁を開鑿  
した石窟。その  
數二十九。

像などに就いて日本化の跡なきを言ふ人は、餘りに部分的特徴に捕へられた觀察を爲す者たるに過ぎぬ。アジャンター壁畫に於ける諸佛のや、肉感的にして動もすれば印度の菩薩像の描法や手法が感覺的誇張に墮せんとするに反して、我が法隆寺金堂壁畫の諸像特に西壁なる彌陀淨土圖に於ける兩脇侍の如何にも人間らしくして然も人間的臭味を離れたる、又中宮寺如意輪觀音が、彌勒菩薩だとも謂はれて居る慈愛の中に哀愁を湛へて、如何にも女性的でありながら然も清淨の權化たるが如き、更には又唐招提寺の金堂が、唐風の様式を備へて、希臘建築の佛をすら偲ばしむるものあるに拘らず、渾然として周圍の風景と融け合ひ、日本の情緒の十二分なるが如き、擧げ來れば中々に其の煩に堪へぬまでに、日本化の立證を爲し得られるであらう。そして斯かる日本化の跡は、ずつと續いて後世に及んで居る。

平等院

山城國宇治にあ  
る。もと關白藤  
原頼道の別荘で  
あつたのを寺と  
したもの。

雪舟

小田氏。畫聖。  
備中の人。永正  
三年歿。

雲谷派

雪舟の畫風を傳  
へた流派。

狩野派

狩野元信の畫風  
を傳へた流派。

南畫

南宋の畫。文人  
畫。

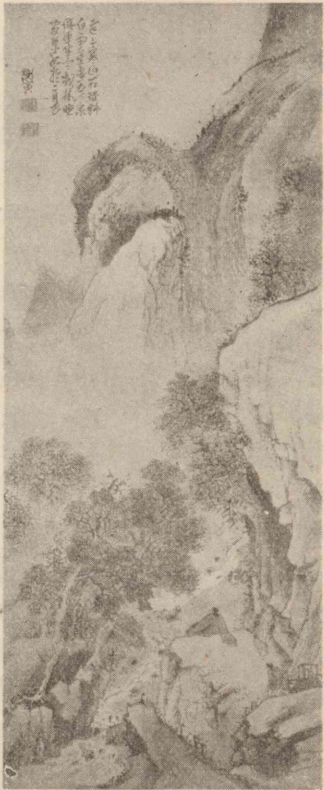
大雅

池野氏。有名な  
南畫家。京都の  
人。安永五年歿。

燕村

與謝氏。江戸時  
代の俳人兼畫  
家。攝津の人。  
天明三年歿。

特に藤原時代の如きは、建築に於ても彫刻に於ても、日本化の極致の示されたる時代と見て差支ないであらう。平等院鳳凰堂の阿彌陀如來の如きは、その適切なる標象と見ることが出来る。



燕村筆楓林停車圖

又後世の繪畫に就いて見ても、足利時代のものは勿論のこと、徳川時代のものに至るまで、やはり支那繪畫の摸倣を事とするに過ぎなかつたといへ、其の間に日本化の跡の著しきを拒むことは出来ない。雪舟や雲谷派や狩野派の如きに於ても、既に之を窺ふことが出来る。又南畫の領域に於ても之を見ることが出来る。大雅や燕村の

四條派  
松村月溪の畫風  
を傳へた流派。  
圓山派  
圓山應舉の畫風  
を傳へた流派。

藝術は、どうして之を模倣藝術と謂はれようぞ。又彼の四條派の如きに至つては、巧みに圓山派の寫生味と南畫の風韻とを融化して、殆んど純日本式なる味を有するものたるに至つた。更に彼の浮世繪なるものに至つては、純乎として日本のものである。歌麿や廣重の藝術の獨創的なることに、誰か異議を挿み得ようぞ。たとへ廣重の繪に南畫的風味のほの見ゆる所があるらうとも、それはただ精神に共通なる或物の存するが爲たるに外ならぬ。技巧の模倣より來るものでは斷じてない。其の他此の方面に於ても尙舉げ來れば際限のないことであるが、ただ目ぼしい所だけ言つてみても、私は右の如くに論證し得られると思ふ。

傳來される外國文化の何れもが、日本化されざるものは無いとして、さてその日本化が、常に多くは純化たり美化たり得たことは、我が文化の誇としなければならぬ。

そして其の純化は、前にも一言したやうに、肉感より精神化へ、硬さより柔かさへ、鋭さより和かみへ、角々しさより圓さへ、毒々しさより瀟洒へ、臆て又濫味へ、拘泥より洒脱へといつた風に行はれるが例である。彫刻の手法や繪畫の描法に於ても、直線は曲線に、弧は拋物線にといふやうな變化を遂げて來たのである。斯くて一般的に日本化されたもの、又純日本的なるものと云へば、あまり複雑なものよりも寧ろ簡單なものが喜ばれ、素朴なものが好まれる風がある。牧歌的の趣味も日本的であり、哀愁に満ちたもの、涙が音もなく心の奥底を流れるやうな感じ、靜かなもの、優しいものは、日本人の最も好む所である。物の哀れや、人情の美しさや、品位の氣高さや、感情の細やかさといふやうなことは、日本文化に最もふさはしいものとされる。

惟ふに、此の種の特徴は、我が國の氣候風土食物などと密接な關係を持つものであらう。山川草木の美しさ、氣候の溫和、四季循環の秩序正しさ等のことは、日本人の美的情緒を養ふには、最も大なる素因を爲して居るに相違ない。然も又氣候の溫和なる割には、地水火風の威力が強くて、その災害を被ることも多く、概して新陳代謝の激しく行はれることは、我が邦人をして、多少憂鬱ならしめ、感傷的ならしめ、又比較的安價なる諦めに陥らしむる所以であらう。

そして斯かる風土は、偉大なる創造や、深遠なる思索や、熱狂的なる信仰やに向つて、人を育てるには適しないから、日本文化の獨創力が、摸倣に於ける純化作用に止る事となつたのであらう。けれども、文化の特性や民族の創造力等については、質的にその偉大さは考へ得られるけれども、諸民族の文化間に於て露骨

な分量的比較はなし得られるものでない。ともかく、我等は摸倣の上にも偉大なるものを表し得るならば、その偉大を以て誇とするに、何の不都合もない筈である。私は此の頃、我が國固有の文化に就いて考へて見る中に、我が民族が自ら輕蔑すべきものでないことを思ふことが切になつて來た。特に古代文化の美はしい華と、香ばしい實とを見るにつけ味ふにつけて、我が國我が民族の甚だ尊いものを有つことを愉快とせざるを得ない。少くとも數多い尊きものを遺してくれた我等の祖先を尊敬せずには居られなくなつて來た。(河田嗣郎の文に據る)

河田嗣郎  
京都の人、明治  
十六年生、法學  
博士、京都帝國  
大學教授。

## 七 清少納言枕草子抄

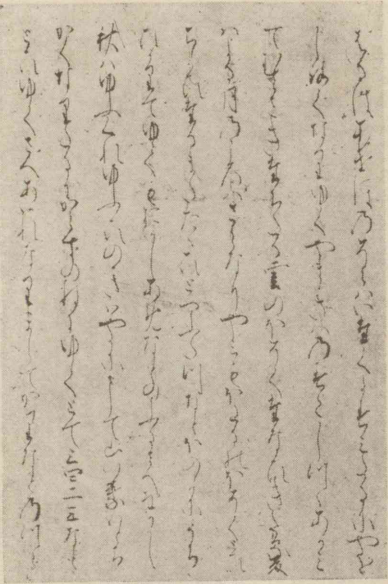
### 一 春はあけぼの



春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏はよる。月の頃は更なり、闇もなほ、螢の多くとびちがひたる。又唯一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨などふるもをかし。秋は夕ぐれ。夕日のさして、山のはいと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風のおと、蟲のねなど、はたいふべきにあらず。冬はつとめて。雪のふりたるいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

二 五節供

正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇りくらして、夕かたは晴れたる空に、月いとあかく、星の數も見えたる。九月九日は、曉がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたく、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされて、つとめては止みにたれど、なほ曇りて、やゝもせばふり落ちぬべく見えたるもをかし。

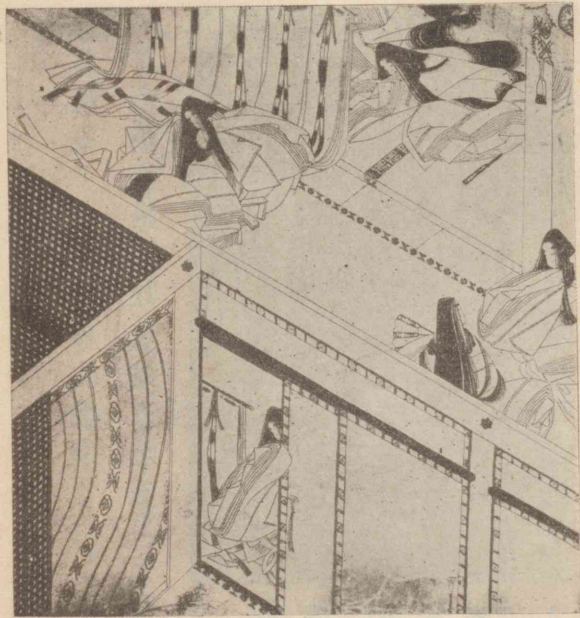


枕草子古寫本

三 蟲は

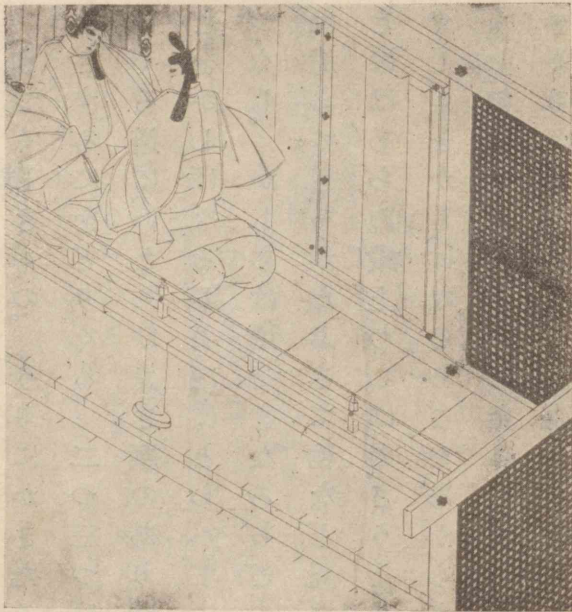
蟲は、鈴蟲、ひぐらしてふ、松蟲、蟋蟀、促織、われから、ひを蟲、螢、蓑

蟲いと哀れなり。鬼のうみたりければ、親に似てこれも恐ろし  
き心あらむとて、親のあやしき衣ひき着せて、いま秋風吹かむ折  
ぞこむとする。待てよ。」といひおきて、逃げていにけるも知らず。



—一—のそ— 活生延宮の代時安平

風のおとを聞き知り  
て、八月ばかりになれ  
ば、ちゝよちゝよとは  
かなげに鳴く、いみじ  
うあはれなり。ぬか  
づき蟲、またあはれな  
り。さる心ちに道心  
おこして、つきありく  
らむよ。思ひかけず、  
暗き所などにほとめ



(巻繪子草枕) —二—のそ— 上 同

どよ。人の名につきたる、いとうとまし。  
うたげなり。火近う取りよせて、物語など見るに、草子のうへな  
どに飛びありく、いとをかし。蟻はいとにくけれど、かろびいみ

じうて、水のうへなどを、ただ歩みにあゆみありくこそをかしけれ。

四 うつくしきもの

うつくしきもの。うりにかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。二つ三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。かしらは尼そぎなるちごの、目に髪のおほへるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見たるもいとうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごを、あからさまに抱きてあそばしいつくしむ程、かいつきて寝たるいとらうたし。雛の調度。蓮のうき葉のいとちひさきを池より取りあげたる。葵のいとちひさ

き。何もくちひさき物は、みなうつくし。いみじうしろく肥えたるちごの二つばかりなるが、二藍のうす物など、衣ながにて、たすきゆひたるがはひ出でたるも、又短きが袖がちなる着て歩くも、みなうつくし。八つ九つ十ばかりをのこごの、聲はをさなげにて文よみたるも、いとうつくし。鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよくとかしがましう鳴きて、人のしりさきにたちてありくもをかし。また親のもとにつれだちてはしるもみなうつくし。かりの子。るりの壺。

五 香爐峯の雪

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり侍ふに、少納言よ。香爐峯の雪いかならむ。と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。人々もさる事は知り、歌などにさへうたへど、

香爐峯の雪  
遺愛寺鐘欲枕  
聽香爐峯雪撥  
簾看  
(白居易)

枕草子

清原元輔の女、清少納言の著。その日常生活の経験と感想とを叙述したもの。

和辻哲郎

明治二十二年兵庫縣に生れた。京都帝國大學教授。

イデア

Idea  
觀念

思ひこそ寄らざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり。」といふ。(清少納言枕草子)

### 八 清少納言

和辻哲郎

清少納言の勝氣な強い性格は、ものの哀れに對する彼の女の態度を時人と異ならしめた。元來、ものの哀れなるものは、永遠なるイデアへの思慕であつて、單なる感傷的な哀感ではない。それは無限性の感情となつて内より湧き、あらゆる過ぎ行くものの姿に底知れぬ悲哀を感じしめる。しかし、この底知れぬ深みに沈潜する意力を缺くものは、安易な満足、或は輕易な涙によつて、底の深さを遮斷する。そこに感傷性が生れて生活を淺薄化するのである。清少納言は時人と共に輕易な涙に沈溺することを欲しなかつた。それをするには彼の女はあまりに強か

つた。しかしその強さは、無限なるものに突進む力とはならなかつた。彼の女もまた官能的享樂人として時代の子である。ただ彼の女は、過行く享樂の内に永遠を欲して徒に感傷するよりは、享樂が過行くものなることを諦視するところの道に立つたのである。この點で彼の女は、紫式部が情熱的であるに對して、むしろ確乎たる冷徹を持する。さうして彼の女の全注意を、感覺的なるものに現れた永遠の美の捕捉の方に向ける。彼の女の周到にして靜かな觀察には、右の意味で主觀的情熱からの超越がある。

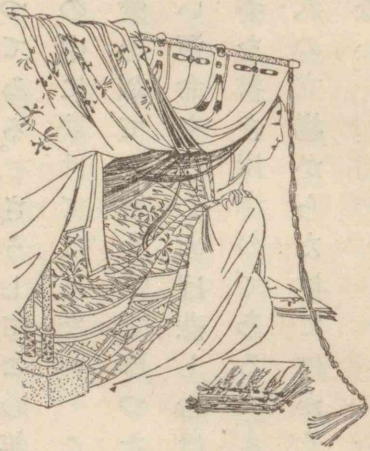
しかし我々は彼の女が、ものの哀れを感じなかつたと考へてはならない。彼の女の性格はそれを感傷的に詠嘆させなかつた。が、彼の女の客觀的な描寫には、明かにその裏づけがある。例へば中宮定子の描寫がそれである。草子の描いてゐる時代

中宮定子  
藤原道隆の女  
で、一條帝の中  
宮、長保二年薨

の末期は、丁度中宮の運の傾いて行く時であり、彼の女はこの悲しい運命の最も直接な目撃者として、最後まで中宮に忠實であつた。しかし彼の女はこの悲しさを泣き訴へようとはしない。ただ彼の女が哀れな中宮の運命に寄せた満腔の同情を、中宮の描寫そのものの内に生かして行くのであつた。我々はこの草子のうちに、人間の心の隅々まで見渡しつゝ、微笑みながらそれを見まもつてゐるやうな、心廣い、賢い、敏感な、さうして心やさしい中宮の姿を見出す。それは、優れた人間と自任する彼の女がなほ仰ぎ見るに價する人格である。従つて中宮の前には、彼の女の強い性格も愛すべきものとして是認される。例へば、彼の女が平生、すべて人には第一の、最も親しい者と思はれなければつまらない。でなければ、むしろ憎まれてゐよう。第二、第三に思はれるのは死んでもいやだ。」と主張するのを聞いて、中宮は或

九品蓮臺  
佛語、極樂にあ  
るといふ蓮のう  
てな、九の階級  
に分れてゐる。  
即ち上品中品下  
品と三等に分れ  
其の各々が又上  
生中生下生と分  
れてゐる。

時人々の多くゐる前で、お前を思はうか思ふまいか、私がお前を最も親しい者と思はなければ如何する。」といふ問をひそかに紙に書いて彼の女へお投げになつた。彼の女は、九品蓮臺の中に



(筆齋容池菊) 言納少清

は、下品といふとも。」と同じく紙に書いて答へた。中宮の情を佛の慈悲にたとへ、中宮に對してのみは日頃の主張を撤回したのである。そこで中宮は、あからさまに言葉に出していはれた。中宮「無

下に思ひ屈じにけり。いとわろし。言ひ初めつることは、さてこそあらめ。」彼の女「人に隨ひてこそ。」中宮「それがわろきぞかし。第一の人に、又一に思はれんところ思はめ。」(くちをし)この問答に

於ては明かに中宮の方が姉として、強情な彼の女をいつくしみ給ふのである。しかも我々はこの中宮が、十六歳にして中宮とおなりになり、廿五歳にして皇后として産褥に逝かれたことを知つてゐる。さうしてこの年若きにふさはしい描寫もこの草子の中に缺けてはゐない。これらの中に我々は、彼の女がいかに愛を以て中宮を描き奉つたかを感じず。彼の女は中宮の悲しい運命を悲しめば悲しむほど、なほ一層明るくめでたく中宮の姿を書き出すのである。「もの哀れ」の裏づけがなく、單に享樂人の立場からだけでは、かくの如き「人間」を描出することは出来ない。

彼の女が自然及び人生に於ける感覺的なるものを描く際は、右の中宮の場合に於けると同じく、ものの哀れの裏づけがある。もとより彼の女の眼界は、當時の貴族達のやうに、極めて狭い。人生は京都の貴族の生活を出でず、自然は秋草の如き優しさの一面をしか見なかつた。しかしこの狭い眼界に於て、彼の女の見たところは、單なる享樂の對象ではなくして、美そのものである。過ぎ行く姿に宿れる「過ぎ行かざるもの」である。いかに多くそこに時代特殊の趣味が現れてゐるにもせよ、我々はなほ彼の女の纖銳、細緻なる感受を嘆美せざるを得ない。

彼の女は「わびしげに見ゆるもの」として、眞夏の日の日盛りにならぬ下等な牛をつけてのろ／＼と行く穢い車や、年老いた乞食や、身なりの悪い下種女の子を負ふ姿や、黒くきたない小さい板屋の雨に濡れた光景などを擧げた。是らの姿を「わびしく見る心は、人生にある不調和に痛み傷つかない心ではない。しかし彼の女は、倫理的なもの、美的なものに對して、異なる標準を持つ

てゐたのではない。「にくきもの」として彼の女は、急ぐ事あるをりに長言する客人、ことなる事なき男の、ひき入れ聲して艶だちたる「といふ如きを擧げると共に、其の場に墨の中に石こもりて、きし／＼ときしみたる、墨つかぬ硯などを並べてゐる。思ふ壺にはまつて來ない、不調和なものは、彼の女にとつて一樣に醜である。倫理的なものもまた美的規準によつて評價されるのである。従つて彼の女は、才ある人の前にて、才なき人の、物おぼえ顔に人の名などをいひたるを、かたはらいたきものと感ずると共に、にくげなる兒をおのれが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲の眞似にて、言ひけることなど語りたるにも同情する餘裕を持たない。醜い子供を美しいと強辯する母親に對しては、かたはら痛い感じを抱くにも道理があるが、しかし醜い子供をも嬉しげに愛する母親の姿は、倫理的に見て、美

しくあつても醜くはない。彼の女が「醜いものを愛する」といふところに不調和を感ずるとすれば、それは唯美主義者の偏狹でなくてはならぬ。この偏狹が彼の女の作品から、幾分人間的な、温い情緒を取り去つたやうに見えるのである。従つて彼の女の描寫は、特に温い同情を必要としない「物」「光景」などの寫生や評價に於て、特に目ざましくさえてくるといつていい。

彼の女の靜かで細緻な觀察は、或情景、或人物の描寫に於て、力強い性格描寫を可能にしてゐる。硬化に陥ることなしに性格を描寫する力は、この時代の文學に於てただ彼の女にのみ見られる特徴である。デッサンの確さは紫式部も到底彼の女に及ばない。前にあげた中宮、その父の關白、行成齊信などの描寫はその明かな證據である。特に性格描寫の例としては、大進生昌

デッサン  
Dessin  
「佛蘭西語」  
素描、下繪。

臨時の祭  
毎十一月下の  
酉の日行ふ  
神社の祭禮をい  
ふ。

(なるものと)や藏人おりたる人(心のゆく)などをあげることが出来る。情調を具體的な姿に於て描く事も彼の女の特徴である。臨時の祭の雅樂の稽古調樂の夜の情調を、忍びやかに短く立てる警蹕の聲や、若い男の口ずさむ流行唄や、この浮き浮きした夜の情調をあとに、家路に急ぐ「まめ人」などによつて描いてゐる如き(きりものがた)描寫は、確に明徹といへる。情調の主觀的な漠然たる描寫ではない。

しかし、彼の女はこれらの個々の物象を、一つの心の歴史に編み込むことはしなかつた。草子中の最も長くまとめられてゐる話でも、小さい短篇以上には出てゐない。恐らく彼の女にとつては、これらの短い寫生に示されたと同じ程度の具象性を以て、長い心の推移を描くことは不可能だつたのである。彼の女自身が卷末に記すところによると、これほど鮮かに印象を描く

ことの出來た彼の女も、「いと物おほえぬことぞ多かる」と嘆いてゐる。具象的に描かねば氣の濟まなかつた彼の女の心持が、茲に明かに察せられるであらう。其の心持で、感情の葛藤や、運命の推移を、感覺的に鮮かに描き出すには、非常な力強い意志の力がなくてはならぬ。さうして、それは此の時代の人に、殊に女には望み難いものの隨一であつた。

かくて、彼の女がその豊富な印象を統一するため用ゐた主導機は、連續的な人生の縦斷面を見せることではなく、その横斷面を造つて見せることである。彼の女は「いと色ふかく、枝たをやかに咲き、朝露にぬれて、なよ／＼と廣がり臥したる萩(萩は草の花)も、蓮のうき葉のらうたげにて、のどかに澄める池の面に、大きなると小さきと、廣がり漂ひてありく景色(草は)の、人情にたづさはることなき美しさも、共にそのまゝ、獨立せる一つの姿と見てゐる。



彼の女は何の展開もなく、これらの類型的な姿を點々として並べて行く。さうしてそこに、彼の女の時代と彼の女の心とによつて屈曲せられた、人生そのものの姿を浮び上らせる。これも確に一つの藝術的形式である。

我々は枕草子の持つてゐる特殊の美しさから、特にこの草子の世界に君臨してゐる作者の心から、この時代の精神、特に唯美主義の精神について多くのことを學び得る。またこの唯美主義の心が、この時代の特殊な風俗や宮廷の私事の間に、いかに動いてゐたかといふことを、まざりと見ることが出来る。この意味でこの書は、時代の姿を見るに最もよき材料を提供する。しかし我々はまづこの書に於て、一つの潑刺として活きた心に觸れなくてはならぬ。さうしてこの心の君臨するこの作の世

界の、特殊の美しさに味到しなければならぬ。(日本精神史研究)

### 九 安立町の隠れ家

去冬爰元に罷越し、住吉安立町の内にわづかなる小家かりて、面むきに古道具出置き、下人吉介に朝夕焼せ、世間のいひわけに堺の濱なる小肴を求め、毎日大阪へ遣して町々を商賣いたさせ、敵の隠れ家しのびくに見分け仕候へども、今に見あたり申さず、さてく武運につき申候兄弟と、人には語られず、氣をつくし申候。名字は隠し、名も傳五郎、傳九郎とかへ申し、形をさまざまになして、我等は膏藥賣になりて、隅々残らずさがし、油斷仕り申さず候。

又弟が義は不斷宿に置き申候うちに、上下六七人にて道具なしの供まはり、雨風もなき日和に早駕籠の兩をおろし、

何とやら忍ぶ體に見え申候を傳九郎追つかけ窓のぞき申候へば、頭巾引きかぶりし風俗、敵戸平にうたがふ所なきとて、著込は不斷肌をはなさず、刀おつ取り跡を慕ひ、打つべき首尾を見合せ、先に立ちまはり木蔭より走り出で、横井尉左衛門が悴子見わすれたるか、奥關戸平のがれぬ所と打つてかゝり申候時、此の侍飛びしさり、やれ、また、人たがひと手をあげられしに、傳九郎なほ進みて切入り、けはしくなる時、溝川飛越え、大小をぬぎ捨て無刀になつて、下人どもの勇むを静め、それがしは岩塚團之丞とて生國越前の者なるが、大かた様子も見られよ、筋骨いたみ、主人にお暇申し、熊野へ湯治致すの所に、これは存知もよらぬ難義、此方は多勢なればせんぎの仕やうもあれど、若年の敵うつべき心掛、はやつて我を見違へらるゝの段、すこしも意恨にぞんぜぬと理をせめ

ての斷り、傳九郎承りとゞけ、しばし思案候て、さりとては戸平が形に生寫しなれども、我九歳の時見しことなれば愚覺えにして慥かならず、殊に刀脇ざし捨てて我に安堵させての斷り、戸平ならばよもや是程落つきて始終のさばきは成るまじと思ひ、扱は此方の粗忽、まつびら御赦免なし給はるべし。御年比と申し、戸平と申す者に似させられたる所ありて、近比々々あやまり申候。拙者兄傳五郎と申す者、念を入れて戸平が形を書寫し、すなはち懷中いたし候。右のかたの目の上に二寸ばかりの切疵、髪ちゞみて首筋ふとく、色あさぐろきと書き付け申候。ひとつゝ見合せ候に、あらまし合ひけるも不思議に存じ候と申候時、此の侍横手を打つて、それはめいよの人に我は似申候、あぶない命をひろひ申候と大笑ひして、いまだ若年の身の是程の心ざし、世になき御

親父もさぞく御満足たるべし。其の勢にては追付け本望とげ給はん。もし又北國筋へ御立越なされ候事も御座候はば、必ずおたづねなさるべしと、たがひに禮義申して立別れ、宿に歸りて様子を語り申候を、ひとつく聞き候へば、敵戸平にまぎるる所なし。さりとは武運のつき、又いつの世に廻りあふべき。扱は大阪に隠れしが、大和路へのき候には極まれり。さりながら其方に逢ひ申せば、分別して遠國へ立ちのき候はば、めぐりあふ事不定なり。それがしが目にかゝらぬ事思へば口惜しと、残念顔つき見て傳九郎赤面して、たとへ人違ひにして私の打たざる事はおくれ申候。命を捨つるから別條なき事ぞと、しばらく後悔して其の夕暮に宿を罷出て、今に行方しれず候。定めて彼戸平を二たびうち留める覺悟にて出候とさつし候。

兄弟一所に心をあはせ、雲をわけ地を割き乾坤の中はさがし出し父の孝養にと存じ候に傳九郎にはなれ、さてく是非もなき仕合に候。是によつて四月晦日に住吉の借宅を仕舞ひ南都へ立ち越し申候。東大寺の末寺にしるべ御座候。又是にしるび、戸平在家をたづね申すべく候。貴様御事五月下旬に江戸へ御くだり、其の時分住吉迄御立寄くださるべきよし、此度は御目にかゝり申すまじく候。その御断りのため舟宿中國屋勘六方に此の一通書き残し置き申候。

卯月二十七日

風越傳五郎

德明寺久兵衛様

(萬の文反古)

萬の文反古  
井原西鶴作か。  
西鶴は江戸時代  
に出た小説家、  
元禄六年歿、年  
五十二。

10 幾山河

若山牧水

名は繁、宮崎縣の人、歌人、昭和三年歿、年四十四。

遠くより爽々雨の歩み來て

若山牧水

過ぎゆく夜半を寢ざめてありけり

の幾山河越え去り行かば寂しさの

果てなむ國ぞ今日も旅行く。

筆蹟

聞きおつゝたのしくもあるか松風の今はゆめともうつゝともきこゆ

北原白秋

名は隆吉、福岡縣の人、明治十八年生、詩人。

聞きおつゝたのしくもあるか松風の今はゆめともうつゝともきこゆ ね水

蹟筆水牧山若

北原白秋

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬ、

蜀黍畑の黄なる月の出。

天の川棕櫚と棕櫚との間より

幽かに白し闌けにけらしも。

筆蹟

三日の月ほそくきらめく黍畑さびは黍とし目はさめてあつ

白秋

三日月の光を帯びて來るほど  
多摩川べりの黄昏に立つ。

蹟筆秋白原北

金子薫園

織き月ひかりを帯びて來るほど

多摩川べりの黄昏に立つ。

武藏野の風の夜に來て落葉の

金子薫園

明治九年東京に生る。名は雄太郎。歌人。

窪田空穂

明治十年長野縣に生れた。名は通治。歌人早稻田大學教授。

さびしき音をき、つくしけり。

窪田空穂

朝靄や一もと百合にまつはりて、

露と結ぶをあはれと見るかな。

秋は來ぬ杜にこもりて鳴く鳥の

澄みてするどき響をきけや。

島木赤彦

行く雲はさゝやかなれど、切れぎれに

都の夜を流れ居る見ゆ。

筆蹟

わたつみの空わたる日の沈むまで一つの船にあふこともなし  
赤彦



島木赤彦筆蹟

いたましく天の火を吹く夜の山

眼上にあふぐ驛は暗し。

太田水穂

透きて青き底のいさごにあらはれて

海より秋のきたるを見ずや。

太田水穂  
明治九年長野縣に生れた。名は貞一。  
歌人。

さびしさに背戸のゆふべをいでて見つ

河楊白き秋風の村。

齋藤茂吉

齋藤茂吉

明治十五年山形縣に生れた。  
歌人、醫學博士。

さ庭べの八重山吹の一枝散り、

しばらく見ねばみな散りにけり。

紫の桔梗のつぼみ割りたれば

盡あらはれてに<sup>て</sup>くからなくに。

尾上柴舟

こまやかに一木一木の末動く

風すこしある朝月の山。

ゆらぐべき日はなからめど御民われら

止まず堅めむ大和島根を。

### 一一 萬葉集の旅の歌

佐佐木信綱

一言に旅といつても、萬葉集時代の旅行は、今の旅に比べては、随分ひどい懸隔のあつたものである。既に西行や宗祇や芭蕉の旅と比べてさへ非常な隔たりをもつてゐる。今はわづかに、

尾上柴舟

明治九年岡山縣に生れた。名は八郎。歌人、文學博士。

佐佐木信綱

竹柏園と號す。三重縣の人、明治五年生、文學博士、萬葉學者、歌人。

宗祇

連歌の名家、諸國を遍歴し、文龜二年旅に死んだ。

信州や奥州の山深い峽や、吉野や熊野の奥などをゆけば、その頃の旅情を如實に感ずる事が出来るであらう。それとても、二三十里歩いて、鐵道に遭遇しない所のない今の世では、山を出て野を横ぎつて、地方の小驛から夜行列車に投じてしまへば、それでもう家へ歸つた様な心もちになつてしまふ。都へはいる前の夜の野宿にまでも、旅の心細さを味つた昔の趣とは、驚くべき相違である。

おそらくは上代の地方の部落は極めて小さく、これをつなぐ路は、自然のままに草木の密生した山野を走つてゐたであらう。田地などは殆ど部落のごく近傍にしか見出す事が出来ない。しかしその部落がまた何里と離れる事がある。遠い旅に、野宿は必ずつきものになつてくる。萱を刈り敷いても露はしとどに上からおりる。焚火はしても、火はすぐとだえがちになつた

らう。しかして曉の寒さのおそふまゝに、眠りは早くから妨げられる。その頃の原始の様を想像すれば、旅が今の都會人のする様な愉樂の爲の旅でもなかつたし、江戸時代以後のやうに、相當に便利のあるものでもなかつた事が分るであらう。勿論彼等は、その旅に相應した肉體と精神の所有者ではあつたであらう。けれども決して旅は楽しいものでは無かつたのである。しかし考に入れておかなければならぬのは、萬葉人の心である。彼等の健全で、すなほで、さつぱりした男性的な心もちは、旅そのものの苦しさ不便さに對しても、彼等をあながちに感傷的にはしなかつたであらう。彼等は雨にあひ、暴風にあつた時の苦しさ、寂しさ、恐ろしさをうたつてゐる。唯美しい景色にふれ、鳥の聲に耳傾けた時の朗かな即興ばかりを歌にしてはゐない。男にあつては、その男性らしい一本氣な情のこまやかさ、又女に

あつては、その女性らしい優しい心の悶えをのべて、旅行くものと故郷に在るものとの思を歌つてゐる。

人なみ勝れた肉體と、健全な情感の持主であつた萬葉人は、山野を跋涉しつゝ、眼前の印象に心を取られて無心に足を進めてゐる。しかし、一度ひしくと孤獨の寂しさに襲はれる時、彼の心は故郷の方に走り、あとに残した妻子の事を堪へがたく慕はしく思ふ。それで、萬葉人の旅の歌には、切な望郷の思が、人に迫るばかり鮮かにうたひ出されるのである。

小竹の葉はみ山もさやにさやげども、

我は妹思ふわか來ぬれば。

親しい妻に別れて旅立つた萬葉人の素朴な心には、かうして強い別情が湧いたのであらう。満山には笹の葉をわたる秋風が充ち満ちて聞える。旅情はそゝられる。家郷は一步一步に、

小竹の  
萬葉集卷二、柿  
本人磨の歌

遠ざかつて行く。峠などを越える時、彼はその足を止めて、後の方に思を馳せないではゐられなかつたのである。

しかして、旅もたけなはになると、漸く旅そのものの刻々の印象が、深く彼の心に働きはじめのようになる。そこで始めて、不便な旅は旅人の心にひし／＼と迫つてくる。ことに野宿でもしなければならぬ時、或はもう今日は部落に到着するはずだとももふのに、日は暮れかゝつて、家一つ見えない、雨さへ降りはじめるといつたやうな時、人の心は、旅の寂しさにすつかり占領されてしまふであらう。

苦しくもふりくる雨か神の崎

さぬのわたりに家もあらなくに。

家一つ見えざる野道、それに雨さへふり加つた。苦しくも、と一氣にうたひ出した心もち、それは、旅たけなはの中におゐて、その苦

苦しくも  
萬葉集卷三、長  
奥麻呂の歌。

しさを本當にかみしめた氣持である。

家にあれば筈にもる飯を草まくら

旅にしあれば椎の葉にもる。

などに、當時の、人と自然との境界のさだかでなかつた有様が目に見える。萱を刈り敷いて草枕するといふよりも、椎の葉を器として、旅の食事をすますとは、何といふ簡素であらう。何といふわびしさであらう。

さうした旅のま中にゐれば、誰でもが詩人になる。都における社會生活の對人的心勞を忘れ、心は獨りになり切つて自然の氣息にそのまま、觸れる。ことに萬葉時代の旅である。勿論、今でいふと人里離れた温泉にいつたよりも、もつと人離れた境界であつたらう。心は淨められ切つて、鏡の如くなつたであらう。その時心に映る自然の現象は、ことごとくに深い感銘を引き

家にあれば  
萬葉集卷二、有  
間皇子の歌。



家さかり  
萬葉集卷七、作  
者不詳。

ここにして  
萬葉集卷三、石  
上卿の歌。

おこさないではやまなかつたであらう。

家さかり旅にしあれば秋風の、

さむきゆふべに雁なきわたる。

かやうな深く凄いばかりな旅の情は、湧然として彼等の心に  
わきおこらないでは居なかつたであらう。そんな場合、直接眼  
前の印象に捉はれ、旅その事に心が一杯になつて家の事も行先  
の事も忘れてゐる。それが何かの折に、ふと家の事を思ひ出す  
と、堪へられない懐かしさが、一飛びに雲を越えて、故郷の上まで  
飛んで行く。殊に心のすなほな萬葉人は、この消息に觸れない  
はずはなかつたであらう。

ここにして家やもいづく、白雲の

たなびく山を越えて來にけり。

かうした旅は、その窮迫や不便や、長い間の家人との別離など

によつて、一層人々の感情を純一にもし深めもしたであらう。  
その頃の旅は、たしかに苦しかつたであらう。しかしそれによ  
つて、人々は本當に深く瞬間を味ひ、又それによつて、なほさら深  
く家を愛する事が出來たらうと思ふ。(旅と歌と)

### 二三 菊花の約

一

青々たる春の柳、家園みやとに種うること勿れ。交は輕薄の人と結  
ぶこと勿れ。楊柳茂り易けれども、秋の初風の吹くに耐へんや。  
輕薄の人は交り易くして、去るもまた速かなり。楊柳幾たび春  
に染むるども、輕薄の人は絶えて訪う日なし。

播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。清貧にあま  
なひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老

孟母の操  
孟母三遷の教を  
さす。

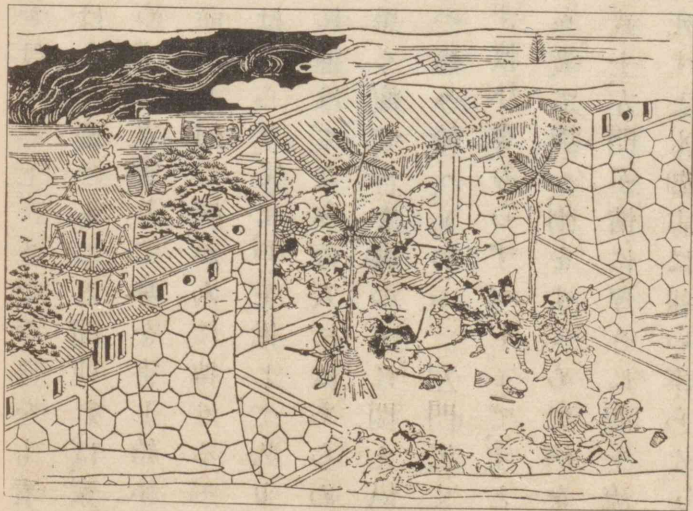
母あり、孟母の操に譲らず、常に紡績を事として、左門が志を助けぬ。その季女は同じ里の佐用氏に養はる。この佐用が家は頗る富み榮えけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、屢事に託せて物を贈ると雖も、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて受くることなし。

一日左門同じ里の何某が許を訪ひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔てて人の苦しむ聲いと哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主、西の國の人と見ゆるが、伴に後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見しまゝに留めまゐらせしに、その夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、いづちの人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出で、心地惑ひぬ。といふ。左門聞きて、悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事なれど、病苦の人のしるべなき旅の空にこの疾

死生命あり  
死生有命、富貴  
在天。  
(論語顔淵篇)

を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのやうをも看ばや。といふを、主とどめて、瘟病は人を過つものと聞ゆれば、家童らにも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ。左門笑うていふ、死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言にて、吾が輩は取らず。とて、戸を推して入りつつ、その人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌は黒く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懐かしげに左門を見て、湯一つ恵み給へ。といふ。左門近く寄りて、士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひまゐらすべし。とて、主と計りて薬を選び、自ら方を案じ、自ら煮て與へ、粥をすゝめて病を看ることなほ同胞の如し。かの武士、左門が情に厚きに涙を流して、かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。といふ。左門慰めて、凡そ疫には日數あり、そのほどを過ぐれば壽命

を過たず。われ日々に詣でて仕へまゐらすべし。」と、實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病稍減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に詞をつくし、左門が陰徳を尊みて、その生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ、吾は出雲の國松江の郷に人と成りし赤穴宗右衛門といふものなるが、僅かに兵書の旨を明めしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師としても學び給ひぬ。さても、吾近



(繪挿語物月雨)約の花菊

尼子經久  
文明八年鹽谷氏  
を攻めて富田城  
を回復した。  
山中黨  
山中鹿之助の一  
族。

江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に留るうち、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乗取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤三刀屋を助けて、經久を亡ぼし給へとす、むれども、氏綱は外勇にして内怯なる愚將なれば果さず、却りて吾を國に留む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて還る路にこの疾に罹りて思ひかけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報い奉らん。左門いふ、見るところを忍びざるは、人たるものの心なるべければ厚き詞ををさむるに故なし。なほ留りていたはり給へ」といふに、赤穴實ある詞をたよりにて日を経るまゝに、物みな平生に遡くぞなりにける。

左門はよき友得たりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子

諸子百家  
〔諸子百六十九家、言「百家」舉「成數」〕  
(漢書註)

百家のことおろく語り出で、とひ辨ふる心愚かならず、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向ひていふ、吾父母に別れまゐらせていと久し。賢弟が老母は即ち吾が母なれば、新に拜み奉らんことを願ふ。老母憐みて幼き心を受け給はんや。左門喜に堪へず、母常に我が孤獨を憂ふ。信ある詞を告げなば、齡も延びなんに。と伴ひて家に歸る。老母喜び迎へて、吾が子不才にて學ぶところ時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ。赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く、何の望がこれに過ぐべきと、喜び嬉しみつゝぞ留りける。  
きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散り果てて、涼しき風による浪に、問はてもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひ

重陽の佳節  
九月九日の菊の節供をいふ。

て、吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別を賜へ。といふ。左門いふ、さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ、月日は逝き易し。遅くともこの秋は過ぎじ。左門いふ、秋はいつの日を定めて待つべき。願はくば約し給へ。赤穴いふ、重陽の佳節をもて歸りくる日とすべし。左門いふ、兄長必ずこの日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らん。と、互に情をつくして、赤穴は西に歸りけり。

二

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊にほやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く起出でて、草の屋の席を拂ひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設す。老母いふ、かの八雲たつ國は山陰の涯にあり

人の心の秋  
色かはる萩の下  
葉を見ても先づ  
人の心の秋ぞ知  
らるゝ  
(新古今集、相  
模)

て、こゝへは百里を隔つと聞く。けふとも定め難きに、その來し  
を見てものすとも遅からじ。」左門いふ、赤穴は信ある武士なれ  
ば、必ず約を誤らじ。その人を見てあわただしからんは、思はん  
ことの恥づかし。とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て厨に備ふ。  
午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿  
り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心  
醉へるが如し。老母、左門を呼びて、人の心の秋にはあらずとも、  
菊の色濃きはけふのみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨  
に移り行くとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、またあす  
の日を待つべし。とあるに否み難く、母をすかして前に臥さしめ、  
若しやと戸の外に出て見れば、銀河影消え消えに、水輪我のみ  
を照らして寂しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄みわたり、浦波の音  
ぞここもとにたちくるやうなる。月の光も山の端に暗くなれ

井臼の力  
井臼弗<sup>レ</sup>任、藜藿  
不<sup>レ</sup>給(瀬淵延之  
陶處士諫)とあ  
る。薪水に苦勞  
すること。

ば今はとて戸をたてて入らんとするに、ただ看る、臙なる黑影の  
中に人ありて、風のまにまにくるを怪しと見れば、赤穴宗右衛門  
なり。躍りあがる心地して、小弟早くより待ちて今に至りぬ。  
盟違へて來り給ふことの嬉しさよ。いざ入らせ給へ。といへど、  
うなづくのみにて物をもいはず。左門進みて南の窓の下に迎  
へ、座につかしめ、兄長來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわ  
びて、あすこそと臥所に入らせ給ふ。寤させまゐらせん。といふ  
に、赤穴また頭を振りてとどめつゝ、更にものをもいはず。左門  
いふ、すでに夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。  
幸に一杯を酌みてやすませ給へ。とて、酒を煖め、下物を列ねてす  
すむるに、赤穴袖をもて面を掩ひその臭を忌みさくるに似たり。  
左門いふ、井臼の力はたもてなすに足らざれども、己が心なり。  
いやしみ給ふこと勿れ。赤穴なほ答もせて、長き息をつきつゝ、

しばししていふ、賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ず怪しみ給ふな。吾は現世の人にあらず、きたなき靈の、假に形を見せつるなり。」左門大いに驚きて、「兄長何故にこの怪しきこと語り出て給ふや、更に夢とも覺えはべらず。」赤穴いふ、賢弟と別れて國に下りしが、國人大かた經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧るものなし。従弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪ひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。熟、經久が爲すところを見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。この約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思

ひ沈めども、遁るゝに方なし。古の人はいふ、「人一日に千里を行くこと能はず、魂能く一日に千里をも行く」と。この理を思出でて、自ら又伏し、今夜陰風に乗りて遙々來り、菊花の約につく。この心を憐み給へ。」といひ終りて、涙湧き出づるが如し。「今は永き別なり。ただ母公に能く仕へ給へ。」とて座を起つと見しが、かき消す如く見えずなりにけり。左門あわてとどめんとすれば、陰風に眼眩みて行方を知らず。俯伏につまづき倒れたるまに、聲を放ちて大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に伏倒れたるを、いそがしく扶け起して、「いかに」と問へども、ただ聲を吞みて泣く泣く更に詞なし。老母問うていふ、赤穴が約に違ふを怨むとならば、あす若し來らば詞なからんものを。」と強く諫むるに、左門漸く答へていふ、兄長今夜菊花の約ちやく特とくに來る。

酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ、しかじかの事にて約に背くが故に、自ら刃に伏して陰魂百里を來るといひて、見えざなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。ただく赦し給へ。」と潜然と泣入る。老母いふ、牢裏に繋がる、人は夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝もまたさる類にやあらん。能く心を鎮むべし。」とあれども、左門頭を振りて、信に夢のまさなきにあらず、兄長はここもとにこそありつれ。」と、また聲をあげて泣き倒る。老母も今は疑はず、相よびてその夜は泣き明かしぬ。

翌日左門母を拜していふ、吾幼より身を翰墨によすと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信をつくさず、徒に天地の間に居る。兄長赤穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて、暫くの

生は浮きたる泡の如く  
人生泡沫如露  
夢幻(法華經方便品)

暇を賜ふべし。老母いふ、吾が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く逗りて、けふを久しき日となすこと勿れ。左門いふ、生は浮きたる泡の如く、且に夕べを定め難しとも、やがて歸り參るべし。」とて、涙を振うて家を出て、佐用氏に行きて、老母の介抱を懇に頼み聞え、出雲の國に參る路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも泣明かしつゝ、十日を経て富田の大城に至り、まづ赤穴丹治が家に行く。

丹治迎へ請じて、翼ある者の告るにあらで、いかに知らせ給ふべき謂はれなし。」と頻りに問ひもとむ。左門いふ、士たるものは富貴消息の事共に論ずべからず、唯信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來りしに報ぜんとして、日夜を逐うてここに下りしなり。吾が學ぶところについで士に尋ねまゐらすべき旨あり。願はくは明かに答へよかし。

公叔座商鞅の  
故事  
史記商君傳にあ  
る。

昔魏の公叔座病の牀に臥したるに、魏王自ら詣でて、手を執りつ  
つ告げけるは、若し忌むべきことあらば、何人をして社稷を守ら  
しめんや。吾が爲に教を遣せ。とあるに、叔座いふ、商鞅年少しと  
雖も奇才あり。王若しこの人を用ひ給はずば、これを殺しても  
境を出すこと勿れ。他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべ  
し。と懇に教へて、また商鞅を私かにまねき、吾汝を勸むれど王許  
さざる色あれば、用ひずば却て汝を害し給へと教ふ。これ君を  
先にし、臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免るべ  
し。といへり。この事、士と宗右衛門とに比べてはいかに。丹治た  
だ頭を低れて詞なし。左門座を進みて、兄長宗右衛門、鹽冶が舊  
交を想ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽冶を捨  
てて、尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、  
命を捨てて百里を來りしは信ある限りなり。士が今尼子に媚

雨月物語  
秋成の著、九篇  
の短篇小説から  
成つてをりいづ  
れも怪異を扱つ  
た物語である。

びて骨肉の人を苦しめ、この横死をなさしめしは友とする信な  
し。經久強ひて留め給ふとも、久しき交を思はば、私かに商鞅叔  
座が信をつくすべきに、ただ榮利にのみ走りて士家の風なきは、  
即ち尼子の家風なるべし。吾今信義を重んじて、わざ／＼ここ  
に來る。汝はまた不義の爲に汚名を遣せ。とて、いひも終らず拔  
打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、  
早く逃れ出でて跡なし。尼子經久このよしを傳へ聞きて、兄弟  
信義の篤きを憐み、左門が跡をも強ひて追はせざりきとなり。  
あゝ、輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。(雨月物語)

一三 大晦日は合はぬ算用

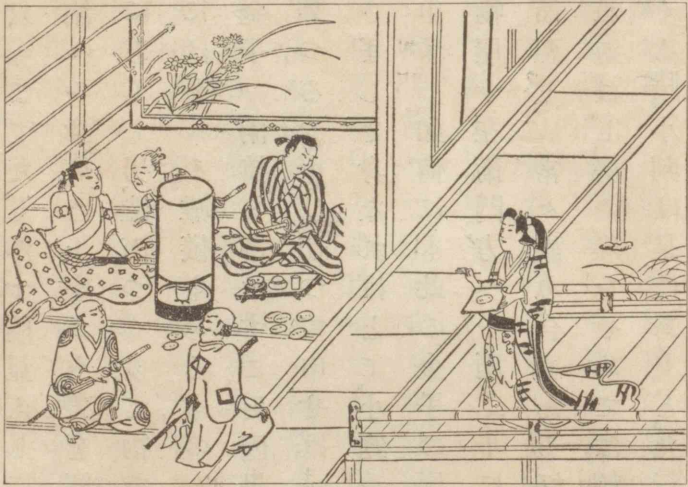
榎搗栗、神の松、やま草の賣聲も忙しく、餅搗く宿の隣に煤も拂  
はず、二十八日まで鬘も剃らず、朱鞘の反りをかへして、春まで待



てといふに、是非に待たぬかと、米屋の若い者を睨みつけて、直なる世を横に渡る男あり。名は原田内助と申して、かくれもなき浪人、廣き江戸にさへ住みかね、この四五年品川の邊に店借りて、朝の薪に事を抜き、夕の油火をも見ず。悲しき年の暮に、女房の兄、半井清庵と申して、神田の明神の横町に薬師あれば、この許へ無心の狀を遣しけるに、度々の事にて迷惑なれども、見捨て難く、金子十兩包みて、上書に、貧病の妙薬金用丸、萬に吉と、記して内儀の方へ送られける。

内助喜び、日頃別して語る浪人仲間へ、酒一つ盛らんと呼びに遣し、幸、雪の夜の面白さ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、さあこれへ。といふ。以上七人の客、いづれも紙子の袖を連れ、時ならぬ一重羽織どこやら昔を忘れず。常の禮儀過ぎてから、亭主の罷り出て、私仕合せの合力を請けて、思のまゝの正月を仕る。

千秋樂  
雅樂の曲の名



(繪挿馬下大) 用算ぬは合は日晦大

と申せば、各、それはあやかりもの。といふ。「それにつき上書に一作あり」と、件の小判を出せば、さても輕口なる御事。と見てまはせば、盃も數重なりて、「よい年忘れ、殊に長座」と千秋樂を謳ひ出し、小判も先づ御仕舞ひ候へ。と集むるに、十兩ありしうち一兩足らず。座中居直り、袖などふるひ、前後を見れども、いよく無いに極まりける。主人の申すは、「その内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覚え違ひ。といふ。

「只今までたしか十兩見えしに、めいようの事ぞかし。とかくは銘々の身晴」と、上座から帶を解けば、その次も検めける。三人めにありし男、澁面つくりて物をも言はざりしが、膝立て直し、浮世にはかゝる難儀もあるものかな。某は身ふるふまでもなし。金子一兩持ちあはすこそ因果なれ。思ひも寄らぬ事に一命を棄つる。と思ひ切つて申せば、一座口を揃へて、ごなたに限らず、あさましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにもあらず」と申す。「如何にも此の金子の出所は、私持來りたる徳乗の小柄、唐物屋十左衛門方へ一兩二歩に昨日賣る事紛れはなけれども、折節悪し。常々談り合せたる好誼ごいみには、生害に及びし後にて御尋ね遊ばし、屍の恥をせめては頼む」と申しもあへず、革柄に手を懸くる時、小判は是にあり」と、丸行燈の陰より投げ出せば、さてはと事を鎮め、ものには念を入れたるが良い」といふ時、内證より内儀

徳乗  
刀劍師後藤徳乗  
名は光次。寛永  
八年歿、年八十  
二。

聲を立て、小判は此方へ參つた。と、重箱の蓋に著けて座敷へ出されける。これは宵に山の芋の煮染物を入れて出されしが、その湯氣にて取着きける、然もあるべし。これでは小判十一兩になりける。何れも申されしは、この金子、ひたもの數多くなることめてたし」といふ。

亭主申すは、九兩の小判、十兩の詮議するに、十一兩になる事、座中金子を持ちあはせられ、最前の難儀を救はんために御出しありしは疑無し。この一兩、我が方に納むべきやうなし、御主へ返したし」と聞くに、誰返事のものもなく、一座異なものとなりて、夜更け鶏も鳴く時なれども、各立ちかねられしに、この上は、亭主が所存のとほり遊ばされて給はれ」と願ひしに、とかく主の心任せに」と申されければ、彼の小判を一升楯に入れて庭の手水鉢の上に置きて、何方にても、この金子の主取らせられて、御歸りたまは

大下馬  
西鶴の著。西鶴  
諸國咄ともいふ

れ。と、御客一人宛立たせまして、一度々々に戸をさしこめて、七人を七度に出して、その後、内助は手燭ともして、見るに、誰とも知らず取つて歸りぬ。あるじ即座の分別、座馴れたる客のしこなし、かれこれ武士のつき合ひ、格別ぞかし。(天下馬)

一四 近世生活の眞髓 藤村 作

民族を異にし時代を異にするに随つて、國民生活の基本となり、基調をなしてゐるものはいろくゝに異つてゐる。道徳を生活の基本となし、法律を生活の基本とする等、時代に由つて違ひ、又感情を生活の基調となし、理智を生活の基調となすなど、民族によつて違ふ事實を見る。我が平安時代の貴族は情趣を總ての生活の基礎として、物の哀れの生活、ゆかしさの生活を營んだのである。現在の我が國の社會の著しい現象の一つは生活の

法律化に在る。ここに現代生活のゆゝしき弊害さへある事實に徴しても、時代生活の基調の種々様々であることはよく知られるのである。

近世生活はこれを以前の時代のそれに比ぶれば頗る複雑である。併しながら、これを纏めて義理と人情の生活であるといふことは決して不當であるまい。言ひ換へれば、義理と人情の二つに律せられた生活、又は義理と人情とを二つの中心とした生活といへよう。斯う纏めれば、至極簡單で明瞭な様であるけれども、併し所謂義理とは何ぞやと問ひ、その内容を分解するに非ざれば、此の命題の意は十分に明瞭にされたとはいへない。

近世の義理は廣くいへば生活の社會規範であり、又常識であつた。この規範常識に従ふや否やには、必ず善惡、正不正の判断が伴うてゐて、義務化され、道徳化されてゐた。義理の規範に従

ひ、常識によつて行動することが、人々の義務であり、道徳的行爲であり、それが正しいことであり、善いことであると信ぜられてゐた。同時にこれに背くことは不善不正の行爲であるとして排斥され、所罰されてゐたのである。當時に在つても、固より多少の法律もあり、制度もあつた。けれども、それは決して今日の様に人々の行爲を一々規定し支配して行くことの出来るやうな具備したものではなかつた。人の物を盗めば獄に下され、人を殺せば死刑に處せられるやうな成文法なり、習慣法なりがあつて、社會を治めてゐたのではあるけれども、人々の行爲の細かなことに至つては唯道徳政治の常識に由る他はなかつた。裁判の如きも一々法律第何條に依るのでなくて、やはり、道徳上政治上の常識に依つてなされるのであつた。斯うして大體から今日の裁判は法律的であり、徳川時代のそれは常識的であつた

といへるやうに、今日の生活の基礎を成すものとしては法律が非常に有力であり、徳川時代の生活の基本は常識、義理であつたといふことが出来る。

近世社會は階級社會で、階級的にそれぞれの分があつた。家族生活に於ても、親は親として、子は子として、夫は夫として、妻は妻として、兄は兄として、弟は弟として、姉は姉として、妹は妹として、それぞれの立場に伴うて互の間に守るべき本分があつた。主従關係に於ては、主は主として、従は従としての本分があり、又社會的關係に於ては、武士階級は武士階級として、町人階級は町人階級としての本分があり、又武士階級の中にもそれぞれの小階級の區別があつて、それに各本分が定まつてゐた。これが此の時代の分である。

階級的の時代であつたから、この分は多くは上下の階級的に

規定されたものであつた。階級的時代には階級的の秩序を保つことが最も重要であるから、この階級的秩序を維持する爲に階級的の分を守るといふことが甚だ重んぜられたのである。分を守れ、分に安んぜよ、分を越ゆるなといふことが非常に大切な教であつた。斯かることは時代が變じ、階級が少くなつた今日にその儘に維持さるべきものではない。近世生活に於ける分は多く縦の上下關係に於ける分であつたが、現代生活に於ける分は多く横の平等關係に於ける分である。

階級社會に於ては、義理の中でも特にこの分を守るといふ義理が重んぜられてゐた。むしろこの分を守る精神の強過ぎた爲に、常にその壓迫を受けて、個性や智能が小さくなつてゐた所に弊があつた。

次に近世生活の今一つの中心であつた人情といふ言葉は、人

間共通の感情といふやうに取れば、廣い意義を有つてゐると思はれる。さういふ様に廣く解せられてゐたことは諍はれないけれども、主なる内容は愛であつた。主として人間相互の間の愛情であつた。主君が家來に對する「なさけ」も、家來が主君に捧げる忠愛も等しく人情である。親が子を慈み、子が親を尊ぶも人情である。夫婦相和し、兄弟姉妹相親しみ、朋友相睦むも亦人情である。これ等を總括して見れば情愛である、人間相互の間の愛である。

斯うして近世以來の用語例に徴すれば、人情といふ語の主要なる内容は愛情であることを諍ふ餘地はあるまい。かやうに解し來れば、近世生活は分と義理と人情を三つの基礎とし中心としたといふ意義は、階級的道義的常識と人間相互の愛情とを基礎とし中心としてゐた生活であつたといふ意義になる。

北原白秋

名は隆吉。福岡縣の人。明治十八年生。詩人。

小ゆるぎの濱

こゆるぎは相模國中郡、今の國府の邊。小ゆるぎの濱といふのは、西は國府津より東は大磯の邊までをいふ。

階級的分と道義的常識に遵ひ、又愛情をも満足させて行くといふ、斯ういふ生活の長所美點に就いて見れば、法律に依つて生きるものに比すれば、ゆとりのあり、暖みのある生活であり、又さういふ社會は住み心地よい社會であつたに相違ない。併しかかる生活は社會の常識や習慣が重んぜらるゝ爲に、自然に行爲の規範を自己以外の社會に求めることとなるから、個性を没して社會に雷同する生活となることは實に已むを得なかつたのである。そこに近世生活第一の弱點がある。近世國文學序説

一五 荒浪千鳥の歌

北原白秋

磯長の小ゆるぎの濱、この濱や荒浪高し。この夜ごろいよいよ高し。時化つづき西風強く、夜は絶えて漁火すら見ね、をりに雨さへ走り、稻妻の青の映りに、鍵形の火の枝の棘、ひりひり



筆 荻田 勝

鳥 千浪 荒

と鋭き光なす。そのたぎちとど  
ろく巻波。時として雹さへ飛ぶ  
になにぞ何ぞ亂るる鳥は。なに  
ぞ何ぞ散り散る鳥は。目に見れ  
ば數かぎりなく、聲きけば消なば  
消ぬかに、へうへうと連れ啼く鳥  
の、群千鳥、荒浪千鳥。荒浪の穂立  
の空をとまるすべ、寝るすべ知ら  
に、ただ飛びて散り散る千鳥。こ  
の海や涯し知られね、この荒れや  
測り知られね、初夜過ぎて、また後  
夜かけて、闇ふかく翼ふる千鳥、こ  
の雨を、また稻妻を、ひた濡れて亂



荒 磯 (平福穂筆)

る、千鳥。ある聲は遠くはぐれて、ある群は千鳥型して、またあるは陸の方向き、またあるはちりちりと散り、すれすれにあるは落ちつつ、波の上驚きて飛び、時に消え、時に明り、いよいよ白く恐れて、いよいよ青に染まりて、時わかず連れ啼く千鳥、へうへうと凍ゆる千鳥。いつまでか全く迷ふぞ、いつまでか飛びてやまぬぞ。磯長の小ゆるぎの荒浪千鳥。荒浪の、天うつ波の、逆まきのとどろきが上、あああはれ、また向き向きに、稻妻の青の脅えに、連れ連れ亂る。啼き連れ亂る。(篁)

一六 倭建命

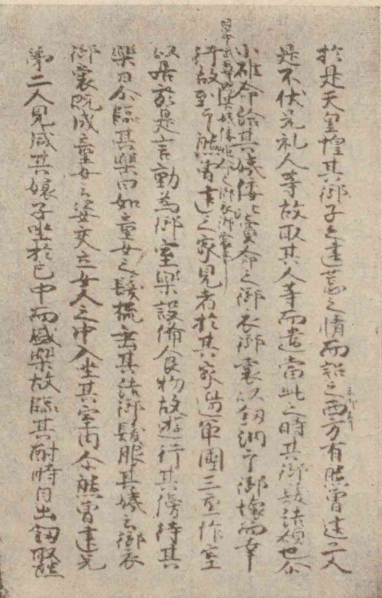
是に天皇其の御子の建く荒き情を惶みまして詔りたまはく、西の方に熊曾建二人有り。是伏はず禮無き人等なり。故其の人等を取れとのりたまひて遣しき。此の時に當りて、其の御髪

天皇  
景行天皇  
御子  
日本武尊

小碓命  
日本武尊

額に結はせり。爾に小碓命、其の姨倭比賣命の御衣、御裳を給はり、劍を御懐に入れて幸行でましき。

故熊曾建が家に到りて見たまへば、其の家の邊に軍三重に圍



眞福寺本古事記

み室を作りてぞ居りける。是に新室樂爲むと言ひ動みて、食物を設け備へたりき。故其の傍を遊行きて、其の樂する日を待ちたまひき。爾に其の

樂の日に臨りて、其の結はせる御髪を童女の髪髪の如梳り垂れ、其の姨の御衣、御裳を服して、既に童女の姿に成りて、女人などもの中に交り立ちて、其の室内に入り坐せり。



纏向の日代の宮  
奈良縣磯城郡纏向村に在つた景行天皇の宮殿。  
大帶日子淤斯呂和氣天皇景行天皇

爾に熊曾建兄弟二人其の嬢子を見感てて己が中に坐せて盛に樂げたりき。故其の酣なる時に、懷より劍を出し、熊曾が衣の衿を取りて、劍を其の胸より刺し通したまふ時に、其の弟建見畏みて逃げ出でき。乃ち其の室の椅本に至りて、其の背皮を取らへて劍を尻より刺し通したまひき。爾に熊曾建白言しつらく、「其の刀をな動かしたまひそ。僕白言すべき有り」とまをす。爾暫し許して押し伏せたまふ。是に白言しつらく、「汝が命は誰にますぞ。」爾ち詔りたまはく、「吾は纏向の日代の宮に坐しまして、大八嶋國知ろしめす大帶日子淤斯呂和氣天皇の御子、名は倭男具那王なり。おれ熊曾建二人伏はず禮無しと聞こし看して、おれを取殺れと詔りたまひて遣せり」とのりたまひき。爾に其の熊曾建、信に然まさむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭の國に、吾二人に益して建き男は坐しけり。是

古事記

三卷、元明天皇の和銅五年正月二十八日太安萬侶が撰録したもので、神話傳説説話を統一し、皇室の御系譜を交へて國家的精神を強調したものである。

久松潜一  
愛知縣の人、東京帝國大學文學部助教授。國文學者。

を以て吾御名を<sup>秋</sup>らむ。今より以後倭建の御子と稱へまをすべし」と白しき。是の事白し<sup>訖</sup>へつれば、即ち熟菰の如振り拆きて殺したまひき。故其の時よりぞ、御名を稱へて倭建命と謂しける。  
(古事記)

一七 古事記と國家的精神 久松潜一

言ふまでもなく古事記は日本の古典の中でも最も複雑なる性質を有して居る作品であつて、單に一の立場に立つて見ることは不當である。純粹に文學として見ることも、もとより可能であるが、萬葉集や源氏物語ではこの立場が唯一のものである。に對して、古事記には更に多くの立場が存するのである。歴史として、古代宗教として、神話として、その他にも立場があると思ふ。かく學問的對象として複雑性を有するが、又少年の胸にも

ある親しみを與へるものがある。我々は少年の時、鰐をだました兎が大國主命に救はれた説話を聞いて、深い興味を覺えた。また素盞鳴尊の八岐大蛇を退治された話を、さては日本武尊の熊襲征伐や蝦夷征伐の物語を、どんなに感激を以てきいたであらうか。かういふ説話はすべて古事記に見えるのである。われらは少年の時に於て古事記の名は知らなかつたが、これらの話は、その時分に既に深く腦裡に印せられて居つたのである。この意味に於て、古事記には少年時代のあこがれをみたすものがあるといふべきである。

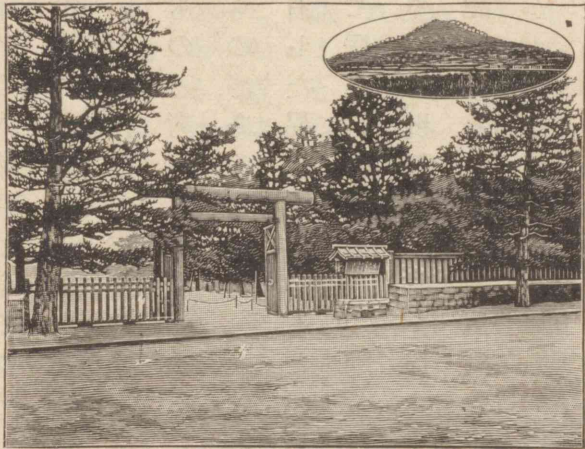
我々は今日に於て學問的對象として古事記の中に幾多の問題を見出す。素盞鳴尊とはいかなる神であられるか、八岐大蛇とは何であるかといふこと等には、未だ學問的にはつきりとした解決がついてゐないのである。素盞鳴尊は自然神、即ち暴風

雨といふ自然現象を神格化した神であるか、もしくは純粹の英雄的な人格神であるかといふ事は、明治時代に於て盛んに論争せられた點である。また八岐大蛇は頭の八ある大蛇であるといつただけで少年の頭には十分入つたのであるが、之を實在のものとして考へる時、川であるといふ説もあり、洪水の現象をさしたものであると見たり、或は劍を腹中に有する所から見て砂鐵を有した異民族であるといふやうにも考へられて、十分解釋されて居ないのである。即ち一見極めて容易な問題であるやうに見えて、批評的精神を以てすれば、複雑で解釋の困難なのが、古事記であると思ふ。單純なやうで無限の複雑さを有つて居るのが古事記である。極めて複雑であるが、それを統一する精神は、はつきりつかむことが出来る。

然らば古事記の内容はいかなる點に統一されて居るかとい

ふに、神と英雄とを中心とした國家的精神によつて統一されて

居ると思ふ。さうしてそれが事件としては土地擴大といふ點によつて表されて居ると思ふ。皮相的にこれを見ると古事記には素樸な原始生活がそのままに現れて居るに過ぎないやうである。兎と鰐との話、大蛇退治の話、兄弟争ひをして海宮に鉤をとりかへしにいつた説話など、その中に道があり、國家的精神が見られるとは思はれないやうであるが、その客觀的な説話的表現の中に、この精



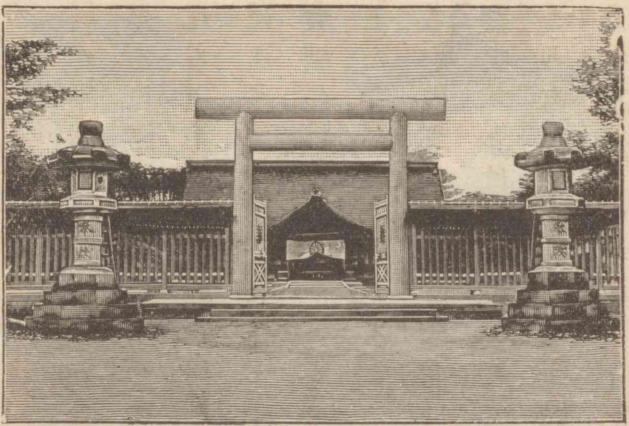
山傍畝と陵御皇天武神

神が滲透して、その素材の構成統一の中にこの精神が見られるのである。

かやうにして、古事記の神話傳説の統一の焦點となる事件を見るに、神話に於て三つの點、歴史傳説に於て三つの點が擧げられる。第一は伊弉諾伊弉册二神の國生みの神話である。二神によつて先づ大八洲が生れたことは、國土創造によつて國家的發展の精神を示したものである。第二は天照大神と素盞鳴尊との交渉葛藤である。これは民族對立のすがたを表現して居るもので、大國主神の話にも連續してゐる。もとより大神と素盞鳴尊とは、自然神として太陽と暴風雨とを表したものと見ることが出来るが、神話全體の上から見れば、人格神として統一されて居るのである。第三は、天孫降臨である。この天孫降臨の神話は、天と地とを結びつけた極めて壯大な場面であるが、これ

は國家的精神の偉大なる統一精神である。國家の創造から、民族的對立となり、更に國家的統一に導く過程、これが古事記に見られる日本神話の最も主要な部分である。

神武天皇以下の歴史傳説に於ける國家發展の立場からの古事記の歴史傳説の三つの焦點は、第一神武天皇の御東征、第二日本武尊の四方御平定、第三神功皇后の新羅御征伐である。これらにも幾多の超現實的要素を加へて國神武天皇の御東征によつて九州



榎原神社宮

土發展の精神が表れてゐる。

から大和への土地發展が見られ、日本武尊の四方御平定によつて大和を中心とした土地經略が見られ、更に神功皇后の新羅御征伐によつて海をこえての國土發展の精神が見られるのである。是等の歴史傳説は、當時に於ける國土發展の精神が傳説に具象化されたものと思はれる。従つてそれには、歴史的現實的なる事柄のみでなく、超現實的な點も多く見られる。殊に日本武尊の傳説の如きは、勇敢で而も早世された不遇の英雄としての尊を中心として、その時代の土地經略のあらゆる事件が綜合されたものと思はれる。それで傳説的興味も頗る多い。熊襲征伐には女裝して單身敵の宴席に至られたといふ構想は、英雄傳説に於ける、英雄の賊徒征伐の一類型ではないかと思はれる。また出雲建の征伐に於て、出雲建を水浴にいざなつて、建の大刀を木刀とすりかへて水浴からあがつた所をうつといふ方法が、

出雲建  
出雲國に居つた  
賊徒。建は勇猛  
の意。

走水  
走水之海で今の  
浦賀海峡。

傳説的な性質を有するやうに思はれる。ことに尊の蝦夷征伐の傳説は、その規模も大きく複雑で、人物も三人の女性を出して居るのである。母のやうに尊をいたはられた御姨倭姫尊のために走水の難に於て身をすてて盡くされた弟橘姫、外に宮簀姫もあつて、傳説を色づけてゐられ、人間的色彩を多くしてゐられるのを見る。そして後世の悲劇的な英雄義經傳説に於て、義經が力を發揮すればするほど不幸に沈淪すると同じく、日本武尊も力を發揮すればするほど不幸な運命に陥つてゆかれるのである。古事記によると蝦夷征伐を命ぜられた時、尊は倭姫に「此に因りて思へばなほ吾早く死ねとおもほすなりけり」といつて居られる。これを見ても、古事記には、尊は、その力の強大なることをむしろ周圍から憚られた悲劇的英雄として扱はれて居ることが知られる。同じ英雄にしても素盞鳴尊は天上から追放

せられても大蛇を退治して劍を得られ、新しい妻を得て新しい運命を開拓してゆかれる絶對的な力を有して居られるに對して、日本武尊はその力を發揮されるほど悲痛な運命に導かれる所に、兩者の相違が見られる。そこに神より人間への展開が見られるのである。かくの如く日本武尊の歴史傳説は、種々の内容を含んでは居るが、その時代の國家的發展の精神が具體化されたものと見られるのである。

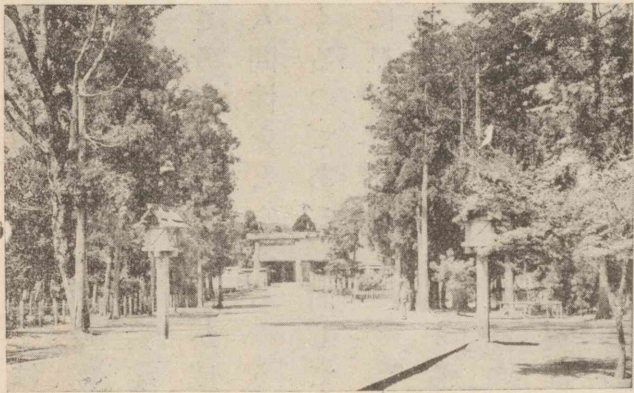
更に神功皇后の歴史傳説に至つては女性にして海の外まで遠征される處に特殊の色彩があり、傳説的興味も多いのである。神功皇后の新羅征伐は熊襲を平げるには先づ新羅をうつべきであるといふ神の託宣のまゝに行はれたのであつて、その動機にも宗教的色彩があるが、遠征に當つて石を御裳の腰に纏いて御出産の時期をのばされたり、或は御舟とともに浪が新羅の國

の半ばまでうちよせられたので、新羅王は恐れて戦はずして降つたりするやうな超現實的な力が多く作用して居るのである。かういふやうに、是等の歴史傳説には、傳説的要素がゆたかである。是等を通じて國家的精神の展開が見られる。而もそれは抽象的に或は主觀的に現れて居るのではなく、神や英雄の英雄的行爲によつて行はれる土地擴大の神話傳説として現れて居るのである。國生みにしても、天孫降臨にしても、神武天皇以後のことにしても、すべて土地擴大を中心とした行爲である。ここに古事記の内容精神に於ける統一性が見られるのである。古事記に描かれた時代は、神代は別として推古時代に及んで居るが、その間の歴史的事實はなほ幾多あつたのである。すでに日本書紀には儒佛の渡來とか、殖産工業の輸入とかいふ文化的發展の歴史的事件が書かれてある。が、古事記には是等の文化的方

面の叙述は殆ど省略して、土地擴大といふ點に中心をおき、それを英雄的な神もしくは人物によつて統一して表現して居る。傳説の人物は人間の理想化されたものである。我等の心は理想の最高潮である英雄を讚美する心から先づ目ざめてくる。さうして我々の心が成長するにつれて、この英雄の中にひそむ人間性をとらへるやうになり、そして理想から現實へと進んでくるのである。而して古事記はこの英雄を崇拜する心を多分に見せてゐる。

この英雄を崇拜する心は一步進めば神に對する崇拜となるのである。神は人間の最高理想である、絶對の力を有する精神である。古事記は英雄を中心とするが、その何れの英雄も神の力の下にたつて居る點に於て、古事記は神の力によつて統一されて居ると言はれるのである。神武天皇が大和に於て困却さ

高倉下  
高倉の主の意、  
高倉は靈劍を納  
めてある倉。



熱田神宮

れた時に、祖神の天照大神は高倉下タカクラによつて劍をたまはつて居る。日本武尊が焼津の危難をのがれられたのは伊勢からたまはつた御劍と燧石ヒシとの力によつたのである。その意味に於て、神話のみならず、神の力は歴史傳説をも支配してゐるのである。而してこの神は國家の創造者であり、統一者である意味に於て、國家の最高理想である。この神を中心とし、その神の力の上にして、べてのことが實現せられることを物語つてゐるから、古事記一篇は國家の最高理想によつて統

一されてゐるといふべきである。

この最高理想としての神は絶対の力であるが、その力はもとより單なる武力でなく、一方に愛の精神をそなへた力である。英雄といふ概念も單なる武力でなく、愛が一面に存するのである。我等が愛する英雄は、義經にしても、日本武尊にしても、單なる武力の勇者でなく、愛と同情との所有者である。不正なる大碓命を殺されたり、單身敵の陣營に入つたりされる勇者でありながら、一方には無限の愛を追求して居られる。夫のために命をすて、荒れくるふ海中に身を投じた弟橘姫に對して、あづまは「や」と無限の感慨をよせて居られるのである。その死にのぞまれては、大和の春を回想して、生あるものを讚美して高らかにうたつて居られるのである。大國主神は出雲民族の偉大なる統一者であるが、愛の人、なつかしい人間味のあつた神である。單

大和の春を回想して

倭は國のまほろば、  
たまたなづく、  
青垣山、隠れる、  
倭しうるはし

なる武力の所有者は東夷として輕蔑されたのである。力と愛との所有者こそ理想的な英雄であり、神である。更にいひ得るならば、劍と玉と鏡とを以て代表される所の強い武力と、和かな愛と、明かな叡智とこそは、英雄と神との最高の理想であり、また國家の最高理想である。この最高理想に向つてすすむ所に國家の生命は永遠なのである。古事記はこの力と愛と叡智との現れである人間の最高理想としての神を求めてゐる所に、その窮極の精神があり、理想があり、統一性があると考へる。それこそは國家の最高理想であるとともに、人間の最高理想である。この最高理想を求めてゆく所に國家も人も一となる。

かくて我々は古事記の中から神と英雄と國家と人とが結びついた、人間の永遠なる姿を見ることが出来るのである。この人間の永遠の姿こそ單純なる童心に通ずるとともに、無限の複

雑さを含んで居るものである。

(上代日本文學の研究)

### 一八 日本の民謡

島木赤彦

島木赤彦  
本名は久保田俊彦、長野縣の人、  
歌人、大正十五年歿、年五十一。

日本民族には、太古から日常の感情を歌謡にうつして、自ら口に歌ひ、且また對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謡の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るにこの萬葉集時代に緊張の頂點にまで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて、著しく弛緩の状態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生みだされた歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩物であつて、そのでき方も、緊張した感情から生



みだされるといふよりも、外形を整へるに苦心して作りだされたもので、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却て短歌の形を存してゐないその當時の民謡に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生れた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流してゐるといふことは、決して不自然ではない。

この事は、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や、催馬樂歌などの中に現れてゐる民謡を調べて見れば、容易にうなづくことができるのである。

笹分けば油こそ破れぬ、利根川の石は踏むとも、いざ河原よりしながどり、猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ、舟かたぶくな、若草の妹も乗りたり、我も乗りたり。

神樂歌  
神祇を祭る時の  
舞曲に合せてう  
たふ歌。  
催馬樂歌  
上古の風俗歌の  
一種。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。そしてこの民謡の系統は、足利、徳川の各時代を経て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らばそれ等の民謡の生命となつてゐるのは何であ



伊豆大島の風俗

らうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産み出した  
惻々として人の心を動かす力をもつ情調である。農民の唄ふ  
歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が籠つてゐる  
し、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遣瀨ない哀音が籠つてゐ  
る。

乳が崎沖まぢや見送りましょが、それから先は神だのみ。

(伊豆大島)

の唄の如き、必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に頼  
りなく住む人々の心理が、神だのみの哀音となつて現れてゐる  
純粹さを味ふべきである。

浅間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して浅間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬  
子の唄であることがわかるではないか。浅間の裾野には追分



(筆華玉平田) 山間浅の冬初

の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中  
仙道の旅人の一夜の泊場であつた。その宿引の女が旅人を呼  
びとめて、一宿を勧める心がこの歌の心である。一夜の宿を勧め  
る歌謠を、勧められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛う  
じて慰めてゐるところが、哀れな漂泊の心である。年が年中、馬の  
鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂下るは輕井澤、追分の曠野である。  
見上げる空にはいつも浅間の山の煙が靡いてゐる。煙は多く南

へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

麥ついて、夜麥ついて、お手にまめが九つ。九つまめを見れば、親里がこひしや。

麥をつくは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとど落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をつく。夜麥をついて掌にできたまめを眺めて、親里を思ふ心の痛切さは、恐らく人麿貫之の秀歌にも勝るものがあらう。

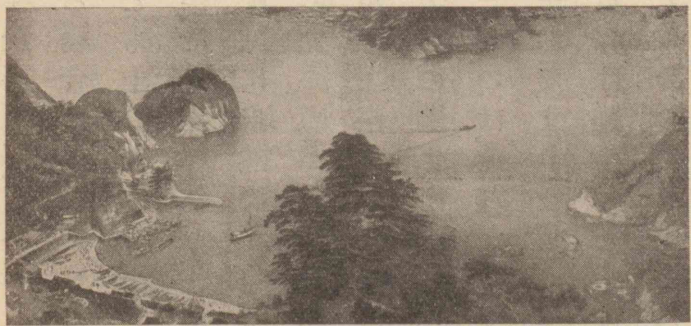
これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が叙べられてゐる。そしてその民謡としての生命も、全くその中にあるのである。

かかる職業的個性の心理や感情を現す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐるといひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くとも土の個性を離れることはできない。その土地のもつ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖までの唄が島に生れ、浅間の煙の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生れ、麥ついての唄が伊豆南方の田舎に生れてゐることを考へ合せると、民謡と地方との關係をほゞ推測することができよう。ただ民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少ない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れて行はれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れてく

る。例へば、麥ついで、の歌は甲斐の南方では、  
 大麥ついで、麥ついで、お手にま  
 みよ九つ。九つのまみよ見れ  
 ば、親の在所こひしよ。  
 と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自  
 然にその調子と響とを異にしてゐる  
 のが味はれる。

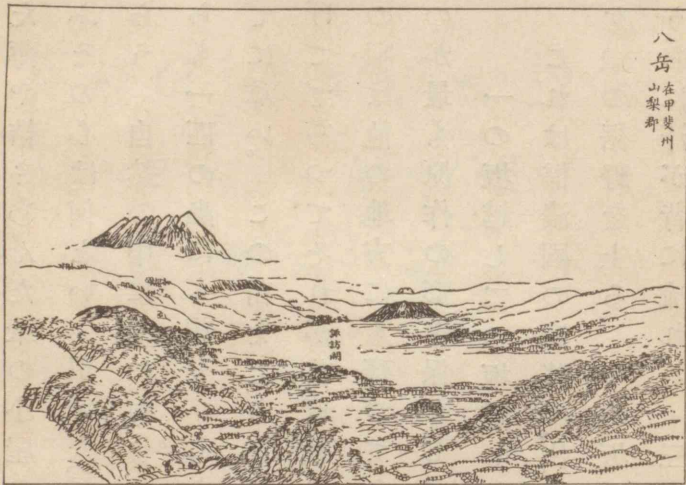
この苗をとりあげて、どこに棲  
 まずや。いなごや。きりすす  
 き、すき葦の、こやのうらに棲ま  
 ずや。

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取  
 唄である。思ふにこの歌謡は、決して



(筆豫一川石) 港漁豆南

近代のものではない。少くとも平安時代か、或はそれ以前に生



八岳 在甲斐州  
山梨縣

(筆晁文谷) 嶽ケ八

れたものが、その優れた秀でた  
 調子をもつがために、南方の邊  
 土に今日まで轉訛しながらも  
 生命を存してゐるのである。  
 歌體が幼くて、哀憐の心が充ち  
 満ちてゐる。この美しい心情  
 をもつた民謡が、今日の日本に  
 残つてゐて、現在農夫の口に歌  
 はれてゐることは、民族の誇と  
 するに足ると思ふ。  
 「苗を取りあげた後は、いなご  
 よ、お前はどうするのか。刈つ

た薄や結きあんだ葦の小屋の中に、自分と共に住まないか」といふその心は、何といふ單純な、同情のこもつた、愛に満ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心をもつ農夫の生活が涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげては、原作は勿論この稻を刈りあげてであつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越し三の坂越しや強清水。

これは信濃國の民謡中、出色の一である。草刈馬に乗つて、八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ

八ヶ嶽  
長野縣諏訪郡と  
佐久郡及び山梨  
縣巨摩郡に跨る  
火山。

意で、草刈の男女に唄はれることによつてこの唄の趣が深い。そしてどこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖いが、山國の明るさは寒い。それが、これ等の民謡の中にも現れてゐるのである。

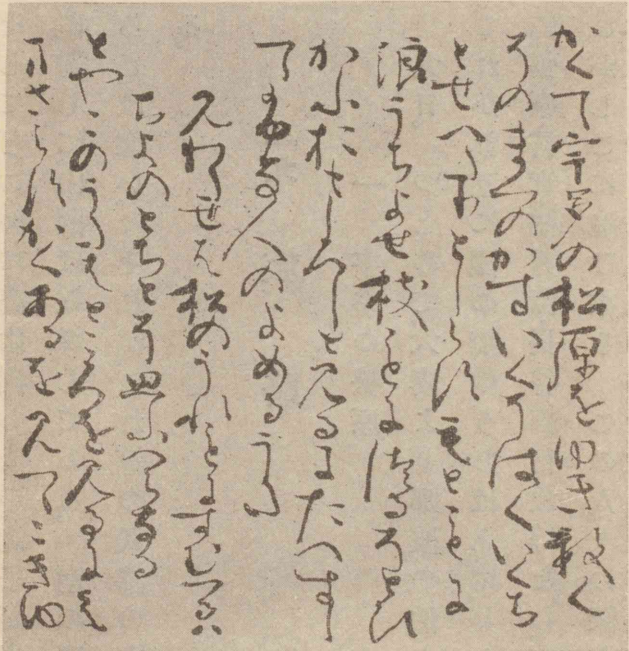
### 一九 旅 路

#### 一 宇多の松原

九日。つとめて、大湊より那波の泊を追はむとて、漕出でけり。これかれ、互に國の境のうちはとて、見おくりに来る人數多が中に、藤原言實、橘秀衡、長谷部行政等なむ、御館出で給ひし日より、ここかしこに追ひ來る。この人々の深き志は、この海には劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむと

大湊  
高知縣長岡郡十  
市の濱。  
那波の泊  
高知縣安藝郡奈  
半利村奈半利川  
の河口。  
國の境  
長岡郡より香美  
郡へ移る境。

筆蹟  
本文、一四二頁  
を見よ



土佐日記 藤原定家筆

てぞ、この人どもは追ひ來ける。かみて漕ぎゆくまに、海の  
ほとりに留まれる人  
も遠くなりぬ。舟の  
人も見えざなりぬ。  
岸にも言ふ事あるべ  
し。舟にも思ふこと  
あれど、かひなし。か  
かれば、この歌をひと  
りごとにして已みぬ。  
おもひやる心は海  
をわたれども、ふみ  
しなれば知らず  
やあるらむ。

宇多の松原  
高知縣香美郡赤  
岡岸本附近の松  
原。

山崎  
京都府乙訓郡。  
小櫃  
神に供物をする  
時用ゐる折櫃。  
勾餅  
菓子的一種。

かくて、宇多の松原を過ぎゆく。その松の數いくそばく、幾千  
年経たりと知らず。もとごとくに浪うち寄せ、枝ごとに鶴とび交  
ふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人の詠める歌、  
見わたせば松のうれごとにしむ鶴は、  
千代のどちとぞ思ふべらなる。

とや。この歌は、處を見るにえ勝らず。かくあるを見つゝ漕ぎ  
ゆくまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天  
氣のこと、襪取の心に委せつ。男もならはぬはいとも心細し。  
まして女は舟底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。

二 歸家

十六日。今日の夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店なる  
小櫃の繪も、勾餅かぎの法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心を  
ぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島阪にて人あるじ

したり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも返りごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川、月の明きにぞ渡る。人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり」と言ひて、ある人の歌、

ひさかたの月におひたるかつら川、

そこなる影もかはらざりけり。

又ある人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川、

そでをひても渡りぬるかな。

又ある人詠める、

かつら川わがこゝろにも通はねど

飛鳥川  
世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる  
(古今集)

おなじ深さに流るべらなり。

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、處々も見えず。京に入りたちて嬉し。家に到りて門に入るに、  
月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。されば、たよりごとに、物も絶えず得させたり。今宵かかること、聲高に物も言はせず、いとほしく見ゆれど、志をばせむとす。さて池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もあり



紀貫之

土佐日記  
紀貫之の著。醍醐天皇の延長八年土佐守となつて赴任した紀貫之が、朱雀天皇の承平五年に都へ歸る時の日記

き。五年六年のうちに、千年や過ぎに、けむ、かた枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大かた皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ、戀ひしきがうちに、この家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちに、猶かなしみに堪へずして、ひそかに、心知れる人といへりける歌、

うまれしも歸らぬものをわが宿に、

小松のあるを見るがかなしき。

とぞいへる。なほ飽かずやあらむ、かくなむ、

見し人を松のちとせに見ましかば

遠く悲しきわかれせましや。

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え盡くさず。とまれかくまれ疾くやりてむ。(土佐日記)

## 二〇 國文學の現代的意義 藤村 作

我々の思想や生活は時代と共に新しく移つて行くものである。又變化して行かねばならないものである。併し全然新しくなるものと思つたら又大きな誤であらう。我々は傳統の影響を受けることが甚だ多いものである。自分自らは新人と稱し、新しい生活をなしてゐると誇つてゐる人でも、存外多く古い傳統を受けてゐるものである。唯さう氣づかずにある人が多しだけである。その傳統の中にはこれを後世から批判すれば、よいものもあれば、つまらぬものもある。所謂玉石混淆の有様である。それで知らずにつまらぬ傳統の拘束を受けてゐる人もあるのである。又よい傳統を受けてゐる人にも自覺的でない爲に、自然これを伸ばして行く力の強くないことを見るので

その  
生活をする  
傳統に  
手を  
加へる  
こと  
は  
よく  
ない  
こと  
を  
見る  
ので



傳統の長所  
改造を以て救ふべき  
ハコレヲヲレ松竹ヲシテ

ある。

普通教育の上で國語教育・國史教育を重んずる理由は外にもあるが、その主なるものは、自國の國民性・國民精神に自覺を持たせることに在ると考へる。歐米の他國・他民族から彼の長を採つて我の短を補ふといふのは、明治維新以來の我が政治の大方針の一であるが、これはこれ迄の處極めて大切な事であつたのである。そして決して決して生活の外面のことにのみ限られてはならないことである。採長補短は國民性・國民精神の上までも及ばねばならぬことと考へられる。一國民の國民性なり國民精神なりを、その古來のまゝに、石の如く固まつたもの、絶對のものとして考へてはならない。これには變遷もあり得べきものであり、又意識的に改善も企つべきものである。唯併しながら其の中にはその國民に取つて變化改造を許さない絶對的・根本的なもの

がある。それはその國民の特徴・長所となつてゐるものであつて、それを涵養して行くことは最も大切であることを忘れてはならない。今日世界の強國を成してゐる國民を見るに、これ等の國民の偉大をなし來つた根柢は、その國民の持つてゐる特殊な性格の少數の長所を發展させて來たものであると信ぜられるのである。それが衰へる時、その國民は衰へ、それを多く失ふ時、その國は滅亡すると思はれるのである。言ひかへれば、採長補短の道に由つて國民性を養育・改善し、國民精神を改良して行くことは肝要であるが、古來傳へ來つて、今日特異なる國家を成し、國民團結の基となり、國民文化を作り上げる上に與つて最も必要であつた國民性の長所を磨き立てて、その光を益發揮させることは決して忘るべからざることである。

此の國民性の自覺といふ上に最も役立つのは國文學ではあ

るまいか。國文學を國史と相提携アヒさせ相助けしめて、これを國民の間に普及して行くことに由つて、この國民性の自覺が成されると思ふ。何となれば、國文學といふものは、國民自身が畫いた自家の影像であり、自己の傳記である。そして偽らざる内面生活の告白である。偽らざる告白なるが故に、道德の標準から見れば、必ずしも善とされるものとも限らず、惡とされるものまでもその儘に表してゐることが多い。そこに動もすると文學が社會から嫌はれる理由もあるけれども、亦それによつて國民生活、國民精神の眞相を見詰むるを得る便の頗る大であることを考へねばならぬ。この眞の相を見詰むるといふことが我々が日本國民としての自覺を得る第一歩であると思ふ。

斯う考へて來ると、我々が今日に生れ合せて、遠い千幾百年來の國文學を知らうとし、これを研究するといふことは、唯過去の

爲に過去を知り過去の爲に過去を研究せんとする道樂でもなく、遊戯でもなく、物好きでもなく、今日の我々の必要の爲であり、我々自身の生活の爲であるのである。我々が國民性、國民精神の理解と自覺とによつて、國民としての、生活の一步一步を確乎としたものにし、充實したものにし、力強いものにしたいた爲である。我々が日本國民として、拜外の夢に迷うて何の爲に生きてゐるかわからないやうな、あやふやな弱い生活から脱して、強い國民的自信を持つ生活を得たいといふ當然の要求の爲である。

又我が社會思想の惡傾向に就いて考へても、政治家の立場からすれば、一方には斯かる惡思想を生み出す社會制度を改善し、社會事業を起すと共に、他方には直接にかかる思想の蔓延を防遏する方法を取るといふより外に方法はないと考へられる。

これを學問・教育といふ立場から見れば、一方にはかかる異端邪

説があればその僻説、邪説を説破し説服すると共に、他方には歴史傳統の中から自然に國民の進むべき正しい道を見出させるやうにすることが肝要である。それには自國の歴史と自國の文化とを精しく見て、正しく解することが必要である。さうして自國の國體と國民性とに自覺を持ち、自國の國民精神に深い親しみを有つやうにすることが必要である。今の我が國民は餘りに自分の國の事を知らなさ過ぎる。國民の思想、精神の營養をよくし、豊にして、國家の身體全體を強壯にするといふ方に努力しなければ、この宿弊は癒らないと考へられるのである。それには國文學が最も多く役立つと思ふのである。國民が進んで直接に萬葉集を読み、源氏物語に親しみ、神皇正統記を見、近松に親しむやうになれば、その中から自然に受ける感化は決して小さいものではあるまいと思ふ。期せずして受くる文學の

思想的又道德的感化といふものは、決して道德書や哲學書のそれに劣るものではないと信ずるのである。(日本文學聯講)

## 二 獅子ヶ城

表に轟く馬車、御歸館と呼ばはつて、唐櫃先に昇入れさせ、優々たる絹傘も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其の物體。錦祥女出向ひ、何とて早き御退出、御前は何と候ぞや。「されば、されば、韃韃大王、靺鞨深く、過分の御加増、十萬騎の旗頭、散騎將軍の官に任せられ、諸侯王の冠裝束賜はり、大役仰付けらるゝ、家の面目是に過ぎず。」とありければ、それはお手柄めでたいめでたい。のう家の吉事は重なるもの、日頃戀ひしい床しいと申し暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟頼みたき事ありとて、門外迄來り給へども、お留守といひ、厳しき國の掟を憚り、男子は皆還し、母上ばかり

見取  
二一  
一七  
日本書紀

を留置きしが、尙も上の聞えを恐れ繩かけて、あれあの奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底、悲しさよ。」とぞ語りける。

「うむ、繩かけしとは能い料簡、上へ聞えて言譯あり。随分もてなせ。いざ先づ我も對面せん。案内申せ。」といふ聲の漏れ聞えてや、妻戸の内、のう錦祥女、甘輝殿のお歸りか。爰は餘り高上り、わらはそれへ。」と立出づる。容貌はいとど老木の松のしめからまれし藤葛起居苦しき其の風情、甘輝見る目も痛はしく、誠世の中の子と云ふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ。其のかひもなき縛めは、時代の掟是非もなし。それ女房お手が痛むか、氣を付けよ。優曇華の客人聊疎略を存ぜず。何事なりとも此の甘輝が身に相應の事ならば。必ず心置かるゝな。」と睦じく待遇せば、老母顔色打解けて、オ、頼もしい忝い。其の詞を聞くから

は何しに心置くべきぞ。頼み入りたき大事密に語り申したし。是へ是へ。」と小聲になり、のう我々此の度唐土へ渡りし事、娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ所へ、大明の帝の御妹、梅檀皇女小船に召され吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語聞くと齊しく、父は素より明朝の廢臣、我が子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を滅し昔の御世に飜し、姫宮を帝位に即けんと先づ日本に残し置き、親子三人此の唐土へは來たれども、あさましや、草木迄皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし、偏に頼み參らす。是が拜む心ぞ。」と額を膝に押しさげ押し下げ、唯一筋の志、思ひこうでぞ見えにける。

甘輝大きに驚き、「ムウ、さては、聞及ぶ日本の和藤内と申すは、此

の錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。ム、武勇の程唐土迄も隠れなく、頼もしき思ひ立ち、尤も斯うこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下帝亡び給ひてより頼むべき主君なく、韃韃の恩賞蒙り月日を送る折柄、望む所の御頼み。早速味方と申したきが、少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず。篤と思案しお返事を。といはせも果てず、ア、そりや御卑怯な、詞が違ふ。是程の大事口より出せば、世間ぞや。思案の間に漏聞えて、不覺を取り、悔んでも返らず。お恨みとは思ふまじ、成れ成らざれ、お返事を、サア、只今。と責めつくれば、ムウ急に返答聞きたくば易い事、易い事。如何にも五常軍甘輝、和藤内が味方なり。といふより早く、錦祥女が胸元取つて引寄せ、劔引抜いて咽吭に差當つる。老母周章てて飛蒐り、二人が中へ割つて入り、持つたる手を踏放し、娘を背中に押しやり、押しやり、仰向に重なり臥し、大聲上げ

て、是情なや、何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺殺すが唐土の習か。心に染まぬ無心を聞くも、女房の縁ある故と心腹が立つての事か。但しは狂氣か。偶、始めて來て見たる母親の目の前で殺さうとする無法人。日頃が思ひやられた。味方をせずばせぬ迄よ。今迄と違うて親のある大事の娘。是、怖い事はない。母にしつかり取りつきや。と隔ての垣と身を捨てて圍ひ歎けば、錦祥女夫の心は知らねども、母の情の有難さ。怪我遊ばすな。とばかりにて、共に涙に咽びけり。

甘輝飛退つて、オ、御不審は御尤も。全く某無法にあらず、狂氣にも候はず。昨日韃韃王より某を召し、此の頃日本より和藤内といふえせ者。少乏下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃韃王を傾け、大明の世に翻さんと、此の土に渡る。彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、此の甘輝を選出され、散騎將軍の官に

任じ、十萬騎の大將を賜はる。和藤内を我が妻の兄弟と今聞くまでは夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く楠とやらんが肝膽を出て、朝比奈辨慶とやらんが勇力ありとも、我亦孔明が腸に分け入り、樊噲項羽が骨髓を借つて、一戦に追つて追ひまくり、和藤内が月代首提げて來らんと廣言吐きし某が、一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬく／＼と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖ぢする者でなし。女に絆され縁に引かれ、腰が抜けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけられんは必定。然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し。恩愛不便の妻を害し、女の縁に引かれざる、義信の二字を額に當て、さつぱりと味方せん爲、ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心籠り、殺す夫の劍の先には忠孝籠る。親の慈悲と忠孝に命を捨てよ、女房」と理非を飾らぬ勇士の詞。「オ、聞分けた。身に適うた忠孝、親に貫うた此の體、孝行のため

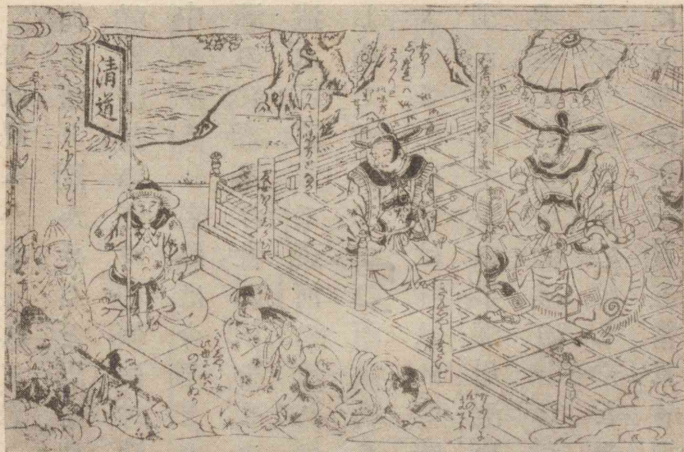
捨つるは惜しいとも思はぬ」と母を押しつけ、と寄り、胸押明くれば、引きよせて、見る目危き氷の劍。「なう悲しや」と駈隔て、押分けんにせん方なく、退けんとするに手は叶はず。娘の袖に喰付いて引退くれれば、夫が寄る。夫の袖を啞へて引けば、娘は死なんと又立寄るを、口に啞へて、唐猫の疇を換ふる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋りつき、一生に親知らず。終に一度の孝行なく、何で恩を送らうぞ。死なせて給へ、母上」と、口説き歎けばわつと泣き、のう悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人。残り二人の父母は産落した大恩あり。中に一人の此の母は憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今爰で死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を悪んで見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に日本

人は邪慳なりと、國の名を引出すは我が日本の恥ぞかし。唐を照らす日影も、日本を照らす日影も、光に二つはなけれども、日本の本とは日の始め、仁義五常情あり。慈悲専らの神國に生を受けたる此の母が、娘殺すを見物し、そも生きて居られうか。願はくは、此の繩が日本の神々の注連繩と顯れ、我を今絞殺し、屍は異國に曝すとも、魂は日本に導き給へ。」と聲を上げ、道もあり情もあり、哀れも籠るくどき泣き。錦祥女は縋りつき母の袂のもろ涙。甘輝も道理に至極し、そぞろ涙に暮れけるが、稍あつて甘輝席を打つて、「ハッア是非もなし、力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對。老母を是に留め置き、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して所を尋ね送り返し參らせよ。」いや、送る迄もなく、此の遣水より黄河迄よき便りには白粉流し。叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎ひにお出ある筈。いで紅解いて

流さん。」と常の一間に入りけり。

母は思にかきくれて、思ふに違ふ世の中を、立歸りて夫や子に、何と語り聞かせんと思ひやる方涙の色。紅より先の唐錦。錦祥女は其の隙に瑠璃の鉢に紅解き入れ、是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる。名残は今ぞと夕波の泉水にさらさら、落ち瀧津瀨の紅葉と浮世の秋をせき下し、共に染めたる泡沫も紅くぐも遣水の落ちて黄河の流れの末、和藤内は岸頭に蓑うち被き座をしめて、赤白二つの河水に心を付けて、水の面、南無三寶、紅が流るゝ。さては望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に、母は預け置かれずと、踏出す足の早瀬川、流をとめて行くさきの堀を飛越え、堀を乗越え、籬透垣踏破り、甘輝が城の奥の庭、泉水にこそ着きにけれ。先づ母は安穩嬉しやと飛上り、縛めの繩引きちぎり、甘輝が前に立ちはだかり、五常軍甘輝といふ髭唐人はわ主よな、天にも地

水か  
もみ  
もみ  
もみ



城ケ子獅

房を去る處もなし。病死するまで便々とも待たれまい。追風

にもたつた一人の母に繩かけた  
 は、おのれをおのれと奉つて、味方  
 に頼まん爲なるにもつてうすれ  
 ば方圖もない。味方にならぬは  
 此の大將が不足なか。第一女房  
 の縁といひ、其方から従ふ筈。サ  
 ア日本無雙の和藤内が直付に頼  
 む返答せい。と柄に手をかけ突立  
 ちたり。「オ、女房の縁といへば  
 猶ならぬ。御邊が日本無雙なれ  
 ば、我は唐土稀代の甘輝。女に絆  
 され味方する勇士にあらず。女

次第にはや歸れ。但し置土産に首が置いて行きたいか。いや  
 さ、日本の土産にうぬが首を。」と兩方拔かんとする所を、錦祥女聲  
 をかけ、「ア、ア、是のうのう病死を待つ迄もなし。唯今流せし  
 紅の水上を見給へ。」と衣裳の胸を押開けば、九寸五分の懐劍。乳  
 の下より肝さき迄横に縫うて刺通し、朱に染みたる其の有様母  
 は是はとばかりにて、かつばと伏して正體なし。和藤内も動轉  
 し、覺悟を極めし夫さへ、そぞろに驚くばかりなり。

錦祥女苦しげに、母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとな  
 さるれど、我が命を惜しみて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥、と  
 かうなる上は女に心引かざるゝ人の誹はよもあるまじ。のう、  
 甘輝殿親兄弟の味方して、力ともなつてたべ。父にも斯くと告  
 げてたべ。もう物いはせて下さるな、苦しいわいの。」とばかりに  
 て、消え消えとこそなりにけり。



珊瑚

夏耶 御  
干時

甘輝涙を押隠し、オ、出來いた出來いた。自害を無にはさせまい。と、和藤内が前に頭をさげ、某先祖明朝の臣下。進んで味方申すべき身の、女の縁に迷ひしと、俗難を憚りしに、我が妻唯今死を以て義を勸むる上は、心清く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に準へ御名を改め、延平王國性爺鄭成功と號し、裝束召させ奉らん。と武運開くる唐櫓の、二重の錦羅綾の袂、緋の裝束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劍金を磨き、絹傘さつとさしかくれば、十萬餘騎の軍兵ども、幢の旗、幡の旗、吹拔き、楯、鉾、弓、鐵砲、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の再び出でたる如くなり。

母は大聲高笑ひ、ア、嬉しや、本望や、あれを見や、錦祥女。御身が命を捨てしゆゑ、親子の本望達したり。親子と思へど、天下の本望。此の劍は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害。此の上は母が存へては始めの詞虚言となり、再び日本の恥を引起す。

國性爺合戦  
近松門左衛門作  
の時代淨瑠璃。

と娘の劍をおつ取つて咽にがばと突立つる。人々是はと立騒げば、ア、寄るまい、寄るまい。とはつたと睨み、のう甘輝、國性爺、母と娘の最期をも、必ず歎くな、悲しむな。韃靼王は面々が母の敵妻の敵と思へば、討つに力あり。氣をたるませぬ母の慈悲、此の遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫をなし、父は存へ教訓せば、世に不足なき大將軍。浮世の思出是迄。と肝のたばねを一抉り切りさばき、サア錦祥女、此の世に心残らぬか。「何しに心残らん」といへども、残る夫婦の名残。親子手を取り引寄せて、國性爺が出立を見上げ、見下し、嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて、一度に息は絶えにけり。(國性爺合戦)

三三 巢林子の藝術

藤村 作

一 世話淨瑠璃

近松巢林子

姓は杉森名は信盛、通稱門左衛門、巢林子とも平安堂とも號した。淨瑠璃作者。享保九年歿、年七十二。

近松巢林子は愛の藝術家といはれてゐる。彼の名を不朽ならしめてゐる二十四曲の世話淨瑠璃の人物は、皆巢林子の博大な愛の胸に抱かれて、冷酷な當時の常識的批判、因襲の道義的非難から保護されてゐるのである。巢林子はかういふ意味に於て、愛の藝術家である、愛の人である。

世話淨瑠璃を通じて見れば、巢林子の人格はその歳を重ねて行く間に發展し、晩年に至つて一層博く且深くなつたと思はれる節がある。

前期の作には敵役といふ方便的人物の外、人物に悪人なく、不所存親不孝の題材にも、忌むべく悪むべき動機がないのを一般とする。場合に由つては人物に道念の強い人物があり、情死などの動機にさへ道義的なものがある。此の點に於ていづれの人物にも立派な所があり、愛すべき所がある。殊に彼等が義理

西鶴

井原西鶴  
浮世草紙の作者  
元禄六年歿。年五十二。

の爲に、同情の爲に、直ちに死を決する所は、恰も武士が忠義の爲に死を鴻毛の輕きに比したやうなものである。健氣といへば健氣である。その死は立派といへば立派であるが、實際の人間としては餘りに生を軽く見過ぎて、人間味がすくない。一本の絲にでも縋つて、一日でも現實を享樂しようとする西鶴の作中の人物の方が人間的である。私どもは巢林子が曲中の死んで行く人物に一通りの理解と同情とは持ち得るけれども、此の死に思ひきりのよすぎる點に於ては、眞の理解と同情とを持ち得ない。

後期の作にはかういふ人物ばかりと限らない。臆病未練な人物もあり、非道の人物もある。それだけ我々には見知り越しの人間である。此等の人物は、その行跡の上でいへば、愚者未練者たることは明かであるけれども、賤しむべき、又悪むべき所は

ない。畢竟作者の博い愛が注がれてゐるからである。

斯く前期後期の作を並べて比較して見ると、前期の作中の人生は比較的完全に近い人物事件が作者の爲に徳化され、淨化されて、そこに智も徳も、それを實行する意志も見えるのである。此の人物事件の徳化淨化といふことは、巢林子の「慰み」の基礎に立つた藝術觀から意識的になされたものでもあるが、彼の同情の愛が自然に斯く徳化して見させたことも勿論否定されぬことと思ふ。併しながら尙深く考察すると、巢林子の性格は之を西鶴などに比べると保守的である。随つてその思想は因襲的である。西鶴が勃興の元祿町人の生活の基調を確實に把持して、猛烈な物質慾と、盲目的に奔放な享樂精神とを彼の藝術中の人生の根本に据ゑてゐるのに拘らず、巢林子は舊道德や固定した慣習を重んじて、所謂義理と人情の葛藤に悩まざるゝ人生に

满腔の同情を注いでゐる。これに由つて見れば、彼は前期に於ては性格の弱點に満ちたまゝの人間、不義不徳の相を暴露したまゝの事件には同情し得なかつたのではあるまいか。即ち彼の愛の博さは此の種の人物事件を容れ得ない程のものであつたのではあるまいか。それが年月を経るに随ひ、巢林子自身の人格が發展して、彼のもとより博かつた愛が一層博大となつて、醜惡なる相をもつた儘に、人物事件に深い愛情を感じ得るやうになつたのではあるまいか。

巢林子の作を讀んだ時の心持を顧みてみると、何ともいひやうのない懐しさ暖さを感じるのである。事件は何れも悲惨であり、人物は何れも教養の足らないものであり、そのものの生涯は缺陷の多いものであるのに、何故斯く懐しく暖く感ずるのであらう。そのわけは色々あり得るが、私は事件・人物を包み得て

あまりある作者自身の博大な愛そのものに引きつけられる感じが主なものであらうと思ふ。此の愛は、曲全體の上を何處となく蔽うてもゐるが、又隨所に印象の深い、人情に徹した名文句となつて滲み出てもゐる。かかる曲を讀んでかかる愛に接することは、その他の點を措いて、たゞそれだけでも、我々に取つては愉快なことである、有效なことである。

## 二 時代淨瑠璃

巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は主従の上下關係と、軍人たる職責を基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが、階級的に獨立して、未だその相互の浸潤・感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。その後、兩階級の間

精神の浸潤・感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壞すやうな事でないかぎり、多く問はれなかつた。のみならず實際町人の徳操・品位を高めたものは、その感化に由つたのである。此の武士精神を町人間に宣傳して町人の武士化を促した上に、近世の所謂通俗文藝の功の多い事は言ふ迄もあるまい。

巢林子は此の方面に於ても、蓋しその尤なるものである。彼は新淨瑠璃の陣頭に立つた人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成せられ、爾後の作者は一人として直接・間接にその感化を受けてゐないものはない。極端に言へば、悉く摸倣追隨者である。かうして彼に依つて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼

以來固定した有様であるが、その中心をなすものは武士道精神に他ならぬ。時代の選み方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、又場所が我が國であらうと、外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は、常に近世武士道精神である。此の精神を表現するに、彼は彼の所謂慰みを目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。彼のなした時代錯誤や階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくして、藝術上に意識した目的から來た事である。彼はこれ位の事を知るだけの歴史の知識は持つて居たに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲に、これを犯すことを辭しなかつたのであらう。この事を教化の上から考へて見れば、寧ろ彼の藝術の強みである。

彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒教風の功利的教訓主義のそれでなかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き淺膚露骨な教訓

馬琴

瀧澤馬琴。

小説家。嘉永元年歿。年八十二。

物に墮せず済んだ。而して教訓物に墮しなかつた所が、教化上一層有效であつたに相違ない。武士道精神を主要内容として、通俗的で受け容れ易く、美しい麗はしい色と甘い味とをつけられた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしめたのであるから、その社會教化上の効果の尠くなかつた事は想像するに難くないのである。唯政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に、或は世人に看過され易いが、若しここに是等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接・間接の社會教化上の業績は、なか／＼偉大なものであつたらうと思ふ。(上方文學と江戸文學)

新制大日本讀本卷十終

昭和六年六月十三日初版印刷  
昭和六年六月十六日初版發行  
昭和六年十一月二日訂正再版印刷  
昭和六年十一月七日訂正再版發行

新制大日本讀本  
奧附

至至	自	定	價
卷卷	卷卷		
十五	四一	金六拾參錢	
		金五拾八錢	

著 作 者 藤 村 作

東京市京橋區銀座一丁目五番地

印 發 者 兼 大日本圖書株式會社

代 表 者 專務取締役 杉山常次郎

不 許 複 製



發 行 所

東京市京橋區銀座一丁目五番地

大日本圖書株式會社

振替口座東京二一九番



小田博章

大日本圖書社

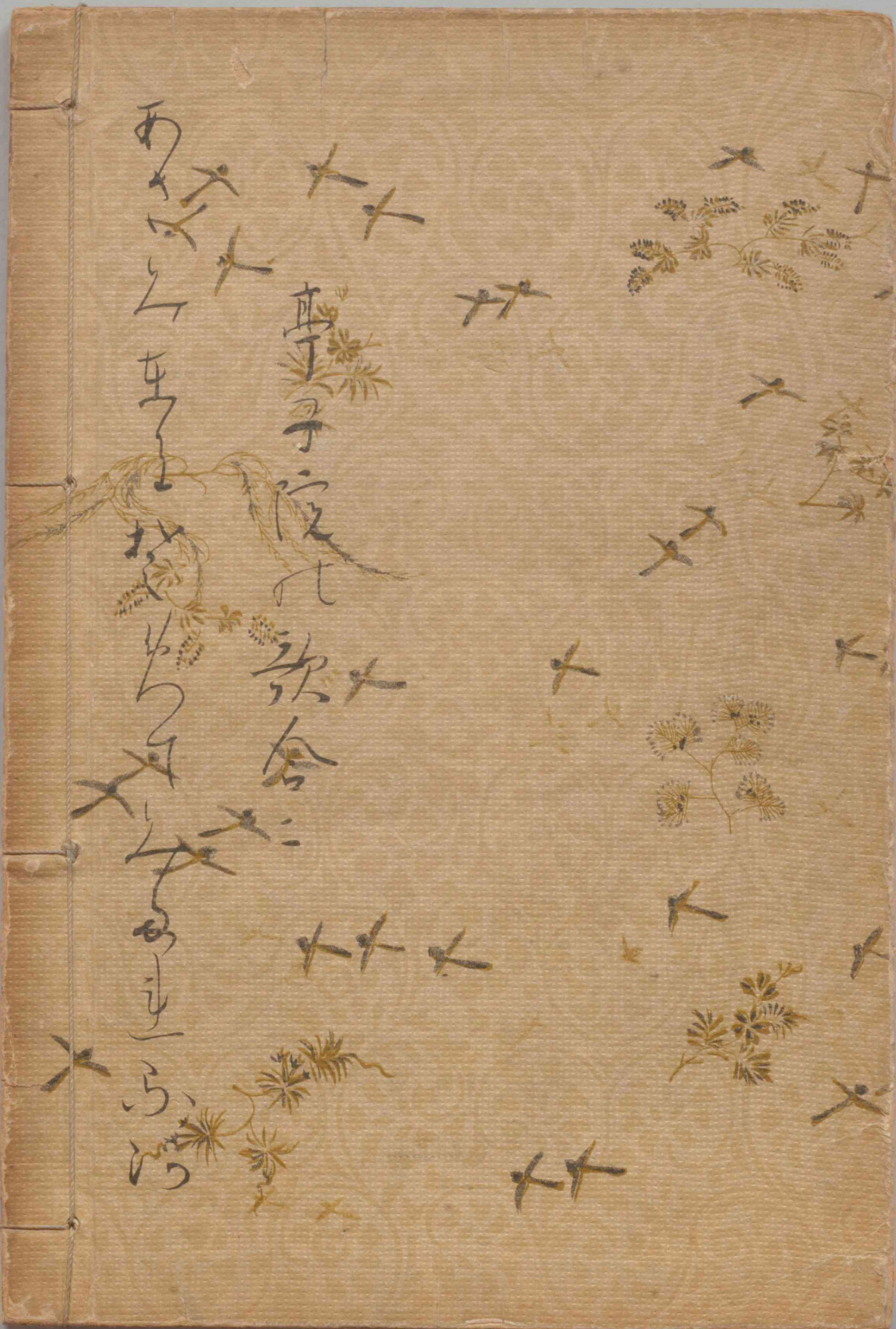
大日本圖書社友會印

大日本圖書社

大日本圖書社

大日本圖書社

全六冊	全八冊
-----	-----



あまのこ  
とて  
ま  
あまのこ  
とて  
ま  
あまのこ  
とて  
ま  
あまのこ  
とて  
ま

高下  
子  
夜  
花  
歌  
合



コテン・フリカツ・ジユン・カクモニテタイレヨ。ムネ・アタヘ。ワニ・ウサギ  
 セツワ・キヨウミ・スサノウミ・ヤマト・オロチ・タイシ。エゾセイムフ・ムクマソ  
 カンケキ・ノウリ・イニス・ホウフウク・シカクワフ・ジンカワジン・ロソウウ  
 コウズイ・ジツボイ・ケン・フクセウ・シヤテフ・フクセウ・イミシク  
 ヒヨウウチキセイレン・コナシ・タンゲ・ナリヨウ・シケン・トチコウタイ  
 ヒソウテキソボク・ケシセイクワフ・カイケウ・サバリ・キヤツカンチキ  
 セツワチキヒヨウケン・サントウ・ソノ・カウセイ・テシセフ・シヨク  
 ジケン・シキレデシセフ・アゲル・イサナミ・コトドソウカウ。トク  
 フウシヨウサフトウ・ミシククタイソフ・ヒヨウケン・オホクニ又レのカミ・レンカ  
 テンソウヨウリン・ソウガイ・バメン・イカ・ミチヒク・クワチイ・シキレデシセフ  
 コツカハツケン・タチ・オトセリ・シラギ・コセイムフ・イタ。テウケシツキエウソ  
 トチケイリヤク・チイセツにケレヨウクワ・ホノヒケウ・ウラカ。エウカン・シカモ  
 ソウセイ・フケウのエイユウ・ソウウ・ネンセキキヨウミ・スヨフル・シヨソウケン  
 レン・エンセキ・コウソウ・ソクトセイムフ・イクルイケイ。イフモクケル・ズイヨク  
 ニンケンチキレキサイ・コウセイ・ヒキキチキ・ハツキ・チンリン・オチイル・シウキ  
 ハツカ。アツカ。フイホウ・カクク。セツタチキ。ヒツウ・ソウキ。テウチイ  
 ナシヨウ・フクム・カクク。トクシニ・タケシンドウキ。エンセイ・アタ  
 御裳の腰に纏ふ。ケウシヨウチキ・レユカニキ・コウイ・ズイヨウ  
 レヨウサンコウキョウ。ユニウ・フクワチキ・ハツケン・シヨジエフ・ホトトト  
 シヨウリヤク。リソウクワ。サイコウチヨウ・サニヒ。セイチヨウ。スウ人イ。タ  
 セツタイ。コニキヤク・マフカミ。タカララジ・ヤイツ・キナン・ヒウチイシ・シトイ  
 ソウ・ホウレヤ・トウイウシヤ・イミ・カイコウリンウ・エジキイワヤン・カイネン・シヨ  
 エウシヤ・ザンエイ・ムネノアイ・ワイキエウ・クワイソウ・サニヒ・ニンケンミ  
 トウイ・ケイベウ・カガミ・エイチ・エイエン・キユウキョク・ドウシン・シントウ

二 獅子ケ城

ヲモテトドロク・バシマ・コキカン・カラヒフサキ・カキイルエセ・ユウウ・キヌカサ  
 コヂヨウケン・カンギ・名はヲフ。モワタイ。ギンシヨウ・シヨ・ゴタイ・レウ・ゴセン  
 カフタン・タイヨウ・エイリヨフ・カク・ワフ・ゴカカウ・ムカシラ・サニキ・シヨウ  
 ケン・シヨウ・ソノ・タマハル・オホセツカ。子カチ・キサジ・コヒレイ・ユカ  
 ー。ル。ス。オホセ。ハツカ。カエス。トメヨク。チウのケン。十人。ヨイ  
 リヨウケン・イヒワケ・ズイケン・タイマン・アムナイ・モレン・ココチカアガリ

カタチ、ロウボク、フジカツラ、タイパー、ルシキソのつせい、イタムレキ、  
イマシト、トキヨ、セ、オキテ、ニヨウボウ、ウドン、コレ、ヒト、イササカ、ソリヤク、  
ムツマじ、クイケウ、カタチ、ケナイ、コト、ヒソカニ、イソ、セ、アン、コウ、ジヨ、  
コ、フ、ネ、ヒト、しく、ハ、イ、シ、ア、マ、チ、ア、カ、シ、ヨ、ホ、ロ、ホ、ス、ヒ、ル、カ、エ、ス、ヒ、ナ、ミ、ヤ、  
テイ、イ、ハ、ツ、セ、ル、タ、カ、ヒ、テ、キ、カ、ウ、チ、タ、ノ、ム、ソ、ク、ン、ヒ、ト、エ、ヒ、タ、ビ、ヒ、サ、  
オ、シ、サ、チ、ハ、ク、ハ、ヒ、ト、ス、ジ、オ、シ、シ、ヨ、ウ、コ、ホ、ム、オ、カ、ラ、ト、ク、レ、ア、ン、ゴ、ヒ、キ、ヨ、ウ、  
コ、ト、ハ、コ、シ、ホ、ド、モ、レ、キ、コ、ス、フ、カ、リ、を、取、リ、ク、ム、セ、ナ、レ、ヒ、キ、マ、リ、ノ、ド、フ、エ、  
サ、レ、ア、ワ、ア、ム、チ、ソ、ト、ヒ、カ、ハ、ワ、ツ、チ、入、リ、フ、ミ、ハ、ナ、シ、ゼ、ナ、カ、オ、ホ、ム、ケ、フ、ス、サ、レ、コ、ス、  
ソ、マ、ア、ム、レ、ン、エ、ン、タ、カ、シ、キ、ヨ、ウ、キ、タ、タ、マ、ム、ホ、ウ、エ、ン、カ、キ、ス、チ、ル、カ、コ、フ、  
ナ、ケ、ク、ケ、ガ、ム、セ、フ、ト、ヒ、サ、カ、ル、ゴ、フ、シ、ン、コ、モ、ツ、ト、モ、セ、ウ、ホ、ウ、ケ、レ、フ、ク、ボ、ウ、  
カ、ン、ジ、ツ、タ、ク、マ、シ、ク、カ、タ、ム、ケ、ヒ、ル、カ、エ、ス、ウ、フ、チ、カ、ン、タ、ン、キ、ヤ、ウ、ド、ン、ケ、ン、  
ハ、ラ、ワ、タ、コ、ツ、フ、イ、カ、ン、サ、カ、マ、キ、ク、ビ、ツ、サ、ケ、ル、コ、ウ、ケ、ン、ハ、ク、ソ、レ、カ、シ、  
ホ、カ、ス、カ、ツ、ウ、ヒ、フ、ク、イ、ク、ケ、イ、カ、ル、カ、タ、シ、ヨ、ニ、アイ、フ、ビ、ン、ツ、マ、カ、イ、ス、  
ク、ヒ、ツ、ク、ク、ハ、ハ、カ、ラ、ネ、コ、ネ、カ、ラ、カ、カ、ル、フ、カ、レ、フ、ス、セ、ン、ガ、カ、イ、ス、カ、ル、  
タ、デ、シ、ヤ、ン、ナ、イ、ト、ア、ム、レ、シ、ケ、イ、ホ、ケ、ツ、ム、イ、ク、コ、コ、ト、ヘ、カ、ソ、ル、ハ、ジ、ア、マ、ネ、ホ、  
ジ、ヤ、ケ、ン、ヒ、カ、テ、モ、ツ、パ、ラ、シ、メ、ナ、ム、ア、ラ、ム、レ、コ、ウ、サ、ク、シ、カ、バ、ネ、サ、ラ、ス、タ、マ、シ、  
ヒ、カ、レ、ル、龍、ノ、ク、ニ、タ、リ、シ、マ、ツ、シ、ヨ、ウ、イ、ン、ヨ、シ、ヤ、  
マリ、フ、カ、ラ、ヌ、カ、ラ、ニ、キ、ズ、キ、ヤ、リ、ム、カ、セ、ニ、ヌ、イ、モ、ツ、バ、ウ、カ、カ、リ、  
カ、ン、ト、ウ、ミ、カ、ウ、ク、ナ、ム、サ、ン、ボ、ウ、ハ、イ、ト、ヒ、コ、エ、ル、ノ、リ、コ、ソ、ル、マ、カ、キ、ス、カ、イ、  
ア、ン、カ、ン、長、此、唐、人、コ、ウ、ス、ニ、ワ、ホ、ン、ム、ソ、ウ、ケ、キ、ツ、ケ、ワ、カ、キ、カ、イ、  
ベ、ム、ベ、ン、オ、ヒ、シ、シ、ン、ダ、イ、オ、キ、シ、ヤ、ケ、キ、レ、ヨ、ウ、ウ、ウ、ケ、ン、ヌ、フ、サ、レ、ト、ホ、ス、  
ア、ケ、ニ、ソ、ム、ム、ウ、チ、ン、カ、ク、コ、シ、ツ、フ、ソ、レ、リ、キ、エ、ギ、エ、ト、ー、  
オ、レ、カ、ケ、ス、テ、カ、イ、タ、チ、カ、ン、タ、シ、カ、イ、カ、シ、セ、ヌ、ス、メ、ン、ナ、ツ、ラ、フ、**ⓐ**、エ、ン、パ、イ、ヨ、ウ、  
コ、ク、セ、イ、ヤ、チ、ウ、セ、イ、ヨ、ウ、コ、ウ、ス、ソ、ウ、ノ、ク、フ、ウ、ン、ラ、リ、ヨ、ウ、ヒ、ソ、ウ、ン、リ、レ、ヨ、ウ、  
ホ、ノ、カ、ン、ム、リ、グ、フ、モ、シ、ノ、ク、フ、サ、ウ、コ、ハ、ク、ク、ク、ヤ、ウ、ケ、ン、ミ、カ、イ、ド、ウ、ノ、ム、タ、  
バ、ン、ノ、ム、タ、フ、キ、ヌ、ク、タ、チ、ホ、コ、チ、フ、ボ、ウ、ヨ、ロ、ヒ、ソ、キ、シ、ラ、ネ、ン、カ、イ、ケ、イ、カ、ン、  
ウ、レ、シ、ム、ホ、ニ、モ、ウ、ナ、カ、ラ、ヘ、ル、キ、ヨ、ケ、ン、ノ、ド、ト、チ、サ、ン、キ、ヨ、ル、ニ、ラ、ム、サ、イ、コ、  
ト、ア、ン、ユ、イ、ガ、ン、カ、ク、**ⓑ**、チ、サ、ヌ、キ、ヨ、ウ、ケ、ン、コ、シ、ヌ、チ、一、決、り、切、り、を、は、ま、  
カタ、ミ、シ、ヤ、ム、イ、キ、エ、カ、ホ、

小田博章

小田博章

五ノ四

長

於是天皇惶其御子之建荒之情而、詔之、西方有熊曾建二人、  
是不伏无禮人等、故取其人等、  
爾小碓命、給其姨倭比賣命之、  
幸行、故到于熊曾建之家見、  
於是言動為御室樂、設備命、  
爾臨其樂日、如童女之髮梳垂、  
御裳、既成童女之姿、交之女人、  
兄弟二人見感其孀子、坐於己、  
懷出劔、取熊曾之夜衿、以劔、  
畏逃出、乃追至其室之橋本、取、  
爾其熊曾建白言、莫動其刀、僕有白言、爾暫許押伏、  
於是白言、汝命者誰、爾詔吾者坐纏向之日代宮所知大、  
八島國、大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子、名倭男具那王者、  
也、意禮熊曾建二人、不伏无禮聞看而、取殺意禮詔而、  
遣、爾其熊曾建、白信然也、於西方除吾二人無建強人、  
然於大倭國、益吾二人而建男者坐祁理、是以吾獻御名、  
自今以後應稱倭建御子、

於是天皇惶其御子之建荒之情而、詔之、西方有熊曾建二人、  
是不伏无禮人等、故取其人等、  
爾小碓命、給其姨倭比賣命之、  
幸行、故到于熊曾建之家見、  
於是言動為御室樂、設備命、  
爾臨其樂日、如童女之髮梳垂、  
御裳、既成童女之姿、交之女人、  
兄弟二人見感其孀子、坐於己、  
懷出劍、取熊曾之夜衿、以劍、  
畏逃出、乃追至其室之橋本、取、  
爾其熊曾建白言、莫動其刀、僕有白言、爾暫許押伏、  
於是白言、汝命者誰、爾詔吾者坐纏向之日代宮所知大、  
八島國、大帶日子於斯呂和氣天皇之御子、名倭男具那王者、  
也、意禮熊曾建二人、不伏無禮聞看而、取殺意禮詔而、  
遣、爾其熊曾建、白信然也、於西方除吾二人無建強人、  
然於大倭國、益吾二人而建男者坐祁理、是以吾獻御名、  
自今以後應稱倭建御子、

於是天皇惶其御子之建荒之情而、詔之、西方有熊曾建二人、  
是不伏无禮人等、故取其人等、  
爾小碓命、給其姨倭比賣命之、  
幸行、故到于熊曾建之家見、  
於是言動為御室樂、設備會、  
爾臨其樂日、如童女之髮梳垂、  
御裳、既成童女之姿、交之女人、  
兄弟二人見感其孀子、坐於己、  
懷出劍、取熊曾之夜衿、以劍、  
畏逃去、乃追至其室之橋本、取、  
爾其熊曾建白言、莫動其刀、僕有白言、爾暫許押伏、  
於是白言、汝命者誰、爾詔吾者坐纏向之日代宮所知大、  
八島國、大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子、名倭男具那王者、  
也、意禮熊曾建二人、不伏无禮聞看而、取殺意禮詔而、  
遣、爾其熊曾建、白信然也、於西方除吾二人無建強人、  
然於大倭國、益吾二人而建男者坐祁理、是以吾獻御名、  
自今以後應稱倭建御子、

於是天皇惶其御子之建荒之情而、詔之、西方有熊曾建二人、  
是不伏无禮人等、故取其人等、  
爾小碓命、給其姨倭比賣命之、  
幸行、故到于熊曾建之家見、  
於是言動為御室樂、設備會、  
爾臨其樂日、如童女之髮梳垂、  
御裳、既成童女之姿、交之女人、  
兄弟二人見感其孀子、坐於己、  
懷出劍、取熊曾之夜衿、以劍、  
畏逃出、乃追至其室之橋本、取、  
爾其熊曾建白言、莫動其刀、僕有白言、爾暫許押伏、  
於是白言、汝命者誰、爾詔吾者坐纏向之日代宮所知大、  
八島國、大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子、名倭男具那王者、  
也、意禮熊曾建二人、不伏無禮聞看而、取殺意禮詔而、  
遣、爾其熊曾建、白信然也、於西方除吾二人無建強人、  
然於大倭國、益吾二人而建男者坐祁理、是以吾獻御名、  
自今以後應稱倭建御子、

しゅうホ  
章甫の冠  
殷代の冠孔子も之  
をつけたのを傳者の  
冠の意に用ひる

龍田の紅葉 乱れ  
流るあり

渡らば錦  
中々絶えそん

先サキの唐錦

紅玉入小たま紅玉をこまうたま

この紅玉の錦は親  
子とが渡らなつて  
かきれるやうい  
かきれるやうい  
親の縁

紅くしる  
紅くしほりしめをつくつ  
み

紅花をこまらうんが  
母の錦にえ親と  
波うなるをいし中  
るやうい●●親の縁  
ありひあ  
しる  
ほりそめをつくつる

紅花をこまらうんが  
母の錦にえ親と  
波うなるをいし中  
るやうい●●親の縁  
ありひあ  
しる  
ほりそめをつくつる